令和元年度

研　究　集　録

秋田県立大曲農業高等学校

Platform

校　長　　小林　吉則

最近よく見聞きする言葉に Platform がある。プラットホームと書くと、駅で列車に乗り降りする場所のことになる。しかし、ホをフォに変えてプラットフォームとすると、全く違うことを意味するようになるらしい。その意味は抽象的でわかりにくいので、たとえていうと「百貨店」である。百貨店は消費者と様々な小売店を繋ぐ場として機能している。ただし、単なる接続場所としてではなく、どちらかというと「連携場所」としての意味合いを持つ。プラットフォームには、異質なものがその場所で新たなものを創り出す仕掛けが用意されている。

何故このようなものが出てきたのだろうか。百貨店に戻って考えるとよくわかる。消費者が服と靴を買いたいと思ったとき、離れた場所で服と靴を買うより便利なだけでなく、それぞれの店を見て、似合った組み合わせをコーディネートできる。新たなファッションが創造できるのである。また、消費者本人だけでなく、服屋や靴屋も洗練されてくる。今、社会に蓄積された技術の進歩は想像を遙かに超えている。しかし、それらを結びつけて新たな可能性を作り出すシステムは大きく立ち後れている。そこで登場したのが、プラットフォームなのである。

何を言いたいかそろそろお気づきだろうか。学校はプラットフォームとして最適な場だということを伝えたかったのである。プラットフォームは「多くの顧客」を有し、「複数の製品やサービス」があり、そのサービスなどが常に「更新」されるという特徴を持つ。では学校はというと、学校を経由せずに社会で働く人はいない。生徒たちは学校を卒業して社会に出て行き、企業はその卒業生たちを労働力として活用することで成り立っている。学校は多くの「顧客（生徒、企業など）」を有しており、それらを結びつける「サービス（連携事業、インターンシップなど）」があり、常にそれらを「更新」している。昨年度までのＳＰＨ事業をステップアップさせた取組として、今年度実施した「職業としての農業フォーラム」では、地域振興局の協力で農家、ＪＡ、農事組合法人、林業大学校、農業関連企業が集まり、生徒と情報交換を行った。企業と学校のコラボ商品の開発は、企業にとってはその商品の可能性を試すのに最適の場であり、学校にとっては結果の成否によらず生徒たちに大きな学習効果を生む。学校を起点に地域を活性化する効果的な取組を創造することができるのである。

小学生の頃「2001年宇宙の旅」を見て、まだ先のことと思っていたが、21世紀に入りもう五分の一も経過した。現代は第４次産業革命を迎えたといわれている。18世紀末の蒸気機関による機械化は第１次産業革命。20世紀初頭の電力を用いた大量生産が第２次産業革命。その半世紀後のコンピュータの登場による自動化が第３次産業革命である。では第４次産業革命とは。キーワードはネットワーク、様々な技術や情報のネットワーク化の時代である。その象徴がＡＩ（人工知能）、ＡＩは既存の情報から新たな情報を創り出す技術なのである。乱暴な言い方になるが、ＡＩ≒情報のPlatform なのだと思う。

農業分野は第４次産業革命で今大きく変わろうとしている。先端技術を活用した「スマート農業」というものに関心が集まってきている。社会の意識も農業に大きく傾いてきており、少子化が進み大学進学者数が減少しているにもかかわらず、大学では農学部の新設ラッシュが見られる。国立の山梨、徳島、福島、私立の龍谷、立命館などである。また、平成21年には約四百だった農業関係の法人は、現在八倍に増えている。このような中、農業高校の果たす役割も重要になってきている。専門高校は教科書の内容自体が常に社会の変化を強く反映しており、実習など実践的な学習が多い。現実社会と強く結びついた授業自体がプラットフォームのサービスとしての機能を持っていることになる。令和４年から始まる新教育課程ではＰＪ学習がほぼ全ての農業科目に位置づけられる。ＰＪ学習は答えのない課題への取組、プラットフォーム機能を用いて答えを創造する科目である。

教育現場で働く私たちは、常に最新の情報を得て更新（改善）していかなければならない。すなわち、常に研修する必要があるのである。昨年度の巻頭言に、この冊子は教育活動の「アーカイブ」となると書いたが、それに「プラットフォームとしての更新方法の参考書」と付け加えてほしい。

令和元年度　研究集録　目次

１　巻頭言「 Platform 」・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 校長　小林　吉則・・・・・ １

２　目次・・・ ２

３　校内研修会
（１）互見授業の取組・・ ３
（２）PTA 研修会・・ ５

４　経験年次別研修会
（１）実践的指導力習得研修講座（２年目）・・・・・・・・・ 教諭　菅原慎太郎・・・・ ７
（２）教職５年目研修講座・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 教諭　三浦　薫・・・・ ９
教諭　風登　友美・・・・ １１
（３）実践的指導力向上研修講座（８年目）・・・・・・・・・ 教諭　佐々木　梢・・・・ １３
（４）中堅教諭等資質向上研修・・・・・・・・・・・・・・・ 教諭　加納　綾子・・・・ １５

５　校外研修
（１）第４回全国高等学校農業教育研究協議会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ １６
（２）農業クラブ指導者養成講座・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ １９

６　実践報告
（１）学年部の取り組み　１年部・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ２２
２年部・・・ ２４
３年部・・・ ２５
（２）農業クラブ東北大会・・ ２８
（３）農業クラブ全国大会・・ ３３
（４）農業クラブ全国大会令和元年度南東北大会クラブ員代表者会議・・・・・・・・・・・・・・ ３４
（５）部活動全国大会
自転車競技部・・ ３９
柔道部・・ ４０
相撲部・・ ４１
なぎなた部・・・ ４２
女子ハンドボール部・・・ ４３

７　編集後記・・ ４４

互見授業の取組

研修部　照井 豊和

１　はじめに

今年度は、昨年度同様、互見授業に授業評価アンケートや指導主事来校にともなう昨年度の一ヶ月前課題と連携して、組織的な授業改善を意識して実施した。ただし、昨年度は、組織で組み立てた授業を公開するイメージであったが、今年度は、公開後の指摘事項、反省点を再度組織で話し合い、その後の授業改善につなげていく、継続的な取組として実施した。

２－１　互見授業の目的

教員同士が、教科の枠を超えてお互いの授業を見合い、評価し合うことで授業の改善、授業力の向上を図る。また、各教科において昨年度の一ヶ月前課題、授業評価アンケートの結果を意識した授業内容を協議し、組織で授業を組み立てる機会とする。

２－２　一ヶ月前課題と授業評価アンケート

【一ヶ月前課題】

学習のねらいを明確にし、生徒の思考を促す発問や言語活動を行うことで主体性や参加意欲を高める授業づくり

【授業評価アンケート】

（1）アンケート実施後、グラフ化したものを配付する。このグラフを各自で検証し、課題を見いだす。

（2）グラフの見方、活用方法

① 数値が低いものが課題となる項目となる。

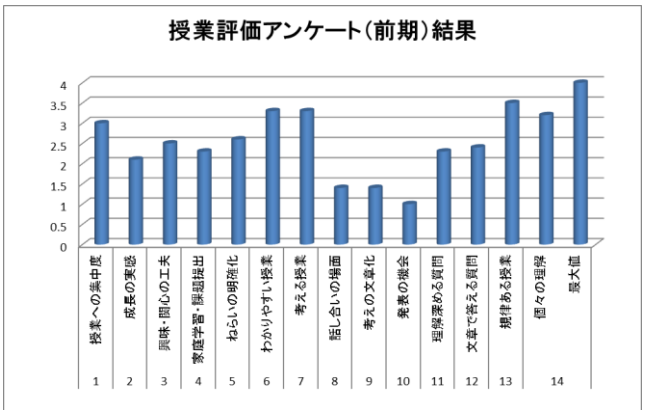
② 分析結果をもとに見いだした課題となる項目を改善することを意識した授業を計画、展開する。

例）前期のグラフ（左図）から「話し合いの場が少ない」「発表の場が少ない」「考えを文章として書かせたりする場面が少ない」などが特に課題として考える。その場合は、話し合いや発表の場を増やした授業を展開する。

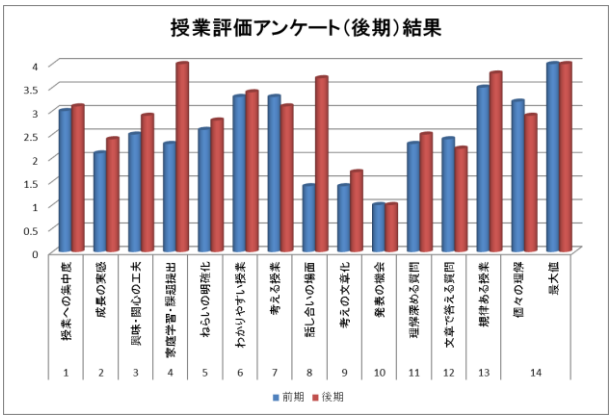
③ 学年末に再度アンケートを行い、課題が改善されたか確認する。

学年末に後期用の比較グラフを配付する。

例）右図から、課題提出や話し合いの場を意識して設けたための改善が見られる。



《前期のアンケート結果》



《後期のアンケート結果の比較グラフ》

２－３　互見授業の期間　　令和元年１１月１１日（月）～１５日（金）

２－４　互見授業の流れ

（１）公開授業　　期間中の授業のうち、授業アンケートを実施した科目を教科から一つ選び公開する。

（２）授　業　者　①授業者は事前に、対象授業の名称及びねらい等について、昨年度の一ヶ月前課題及び授業評価アンケートを意識して教科等内で話し合う。（１０月中に実施）

②話し合った内容を提出してもらい、「互見対象授業一覧」としてまとめる。（１０月末に掲示）

（3）参　観　者　①「互見対象授業一覧」を確認、参観予定を立てる。

②期間内にいずれかの授業を参観する。

③参観後、１１月中に研修部に「互見授業参観シート」を提出する。
その後、授業者に提示する。

（４）授業改善　①受けた助言をもとに各教科、あるいは各学科・部門において授業改善に向けた話し合いを持つ。

②授業者は、各自の授業で実践する。

（5）検　　証　　後期の授業評価アンケートを実施し､課題の解決につながっているか検証する。

２－５　互見授業における主な指摘事項

○個人で考えさせたあと、その考えた内容をペアで交換する時間があり、思考力、表現力の向上が期待できる展開であった。

○何気ない発言も拾って返してあげているから生徒も発言しやすい雰囲気になっていた。

○隣近所と相談しても良い時間が確保され、一人で抱え込まないところが良い。

○考えたり、話し合う時間がタイマーでしっかり示されていて、メリハリある展開になっていた。

○生徒たちが、これまで身に付けた知識・技術を生かし、自由にアレンジした取組となっており、楽しく、かつ達成感のある授業となっていた。

●発問が少ないと生徒が理解できているのか教師側の判断が難しい。

●発表した班に対して、拍手された班とさっさと次に行ってしまった班があり残念だった。

●本文の根拠を探すとき、線を引かせるなどの、「思考の可視化」ができると良い。

３　まとめと課題

昨年度同様、教務部員としてこの取組にあたることができたため、一ヶ月前課題や授業評価アンケートと関連付けて実施することができ、取組の充実とともに授業改善に向けて一定の効果が得られたと思われる。教員相互の評価だけではなく、授業の最適な評価者である生徒からの評価をもとにした授業改善が行われるため、実質にあった具体的な計画ができたと思われる。また、組織での取組を強調したため、各教科内での話し合いや教材の検証など授業改善の面だけではなく、相互の資料やスキルの共有などの効果も得られた。

今後は、互見授業はあくまできっかけであり、限られた期間だけの研修とするのではなく、日頃から相互に授業を参観し、自己研鑽、授業改善につなげられる取組になることを目標とする。授業者、参観者、そして生徒にとっても成果の大きい取組であることからより充実した展開になるよう今後も取組方法について検証していきたい。

令和元年度　ＰＴＡ研修会

研修部　後藤　理子

ＰＴＡ研修会は、本校の施設・設備を見学し、日ごろ生徒が行っている活動を体験することにより、本校の教育活動についての理解を深めるために毎年行っています。今年度は以下の通りに実施しました。御参加いただいた皆さま、ありがとうございました。今後ともよろしくお願いいたします。

１．日　　時：　令和元年１１月２日（土）８：３０～１２：００

２．場　　所：　本校加工研究実験室

３．研修内容：　ジャム作り・試食・校内施設見学

４．日　　程：　８：３０～　８：４０　　開会行事
　　８：４０～　９：２０　　本校教諭伊藤寿人による講座（食品製造について）
　　９：３０～１１：００　　作業工程室にてジャム作りを体験
　　１１：１０～１２：００　　加工研究実験室にてジャムの試食

５．感　　想

【講義について】

・楽しかったです。

・良かったです。

・今年もありがとうございました。施設見学もできて楽しかったです。なかなか入れないので貴重な体験でした。

・調味料がそろわなくても他の代用品があったり、分量を変える事で作れたりする事を知ったので家でも挑戦しようと思います。わかりやすく聞きやすかったです。

・このたび初めてＰＴＡ研修会に参加しました。ジャムは最古の保存食であり、また加工食品の中では安全（保存性）であることも理解しました。またジャムの製造原理（ペクチン、糖、有機酸）についても理解することができました。講師の伊藤先生の話し方もわかりやすく丁寧な口調で非常に理解しやすかったです。

【ジャム作りについて】

・わかりやすくて楽しかったです。

・詳しく教えてもらうことができました。今日はいちごで作りましたが応用して別の果物で作ってみたいです。

・こちらも楽しかったです。今年で卒業なので残念です。一般の人にも解説してほしいです。

・計量から商品化まで体験できると思っていなかったので楽しかったです。

・初めてジャムを作ったわけですが、ひとつひとつの作業においても、わかりやすく丁寧な口調で説明していただき、楽しく理解することができました。大農のイチゴジャムは市販されているジャムよりも高品質かつ安価で今後も機会があれば購入したいと感じました。また同時にリンゴジャム、ブドウジャムを購入することができて、早速イチゴジャムも含め食べたところです。果肉の食感がよかったです。

【その他お気づきの点がありましたらご記入ください】
・ボールがもう少し大きい方が良かったかな。（砂糖を混ぜるとき）
・ジャム作りの時に使用したターナーですが、「シリコン製」ではなく「竹べら」にしてもらいたいです。
・安心・安全・衛生面など子どもたちも緊張感や責任をもって商品化している事を改めて知りました。ありがとうございます。保護者しか参加できないのか？？　他校の保護者（友達）も体験したいと言われました。可能であれば来年度またこの研修会があれば参加したいです。
・東北一の加工設備を有している大農校舎を見学し、また食品の加工体験をすることは、普通高校ではとうてい体験することができないもので、何かの機会に他校や外部向けに公開してみると喜ばれるかもしれません。大農生徒が作っているジャム、味噌、スモークチキンなどもう少し購入しやすい環境を作ってもらえたら、今後も購入したいと思います。貴重な体験ありがとうございました。

実践的指導力習得研修講座（高等学校２年目）を終えて

教諭　菅原　慎太郎

１　はじめに

今年度より始まった本研修講座は、今年度に限り採用２年目と３年目を迎えた教諭が合同で研修を受講した。１年先に採用されている同じ教科の先生たちと研修を受け、昨年度の初任研とはまた違った新鮮な気持ちで受講することができた。講師時代も含め、これまでは日々目の前のことに精一杯取り組み、あっという間に１１年という月日が経ってしまったが、今回の研修では教諭として、また担任として自分に求められているものや、担うべき役割が大きくなっていることを改めて実感することができた研修となった。

２　概要

①研修名　　実践的指導力習得研修講座（高等学校２年目）

②研修の目標　学校教育目標に基づいた教育活動への意識を高め、学習指導やホームルーム経営、生徒指導等についての実践的指導力を身に付ける。

③研修の内容

期	日　　時	研　　修　　内　　容
Ⅰ	６／７ （金）	①保護者対応と連携（講義・演習） ②学校組織の一員として　-学校教育目標とホームルーム経営-（講義・演習） ③単元（題材）及び単位時間の授業構想と実践（講義・協議・演習）
Ⅱ	９／３ （火）	・単元（題材）及び単位時間の授業構想と実践（演習・協議）
携行品		Ⅰ期：担当教科の「高等学校学習指導要領解説」 担当教科科目の任意の教科書 Ⅱ期：学習指導案

３　研修内容

Ⅰ－①　保護者対応と連携

本研修では、的確な生徒理解に基づいた生徒指導を行うためには保護者からの情報収集が必要であると教えていただいた。保護者との関係づくりについては生徒が何も問題行動等を起こしていない安定している時期にしておくと､その後の保護者との連携がとりやすいということも教えていただいた。また困った、あるいは困らせる保護者は「困っている保護者」ととらえ、傾聴しながら一緒に生徒指導にあたっていくことの大切さを理解することができた。

Ⅰ－②　学校組織の一員として　-学校教育目標とホームルーム経営-

現在、社会構造の急激な変化や学校の課題が多様化・複雑化、さらには教員数の減少などの背景がある。そのために個々の力を組織の力にし、学校運営の支援体制を強化する、教職員個々の自律性を高めるなど、組織マネジメントの必要性についてお話をしていただいた。その後、学校教育目標を基盤としてホームルーム経営の考え方についてご教授いただいた。中でも大切なことは学校教育目標や学年経営目標が具現化されていることと、ホームルームの実態や保護者の願いを把握し、担任の個性を生かして「目指す生徒像」が明確になっていることである。大曲農業高校に赴任したばかりで、１年間迷走してきたと反省している。ただ日々の生活の中でホームルームの実態や面談をとおして保護者の願いを把握することができたと感じている。あとは私自身の個性を見出し、強みを活かしたホームルームづくりを心掛けたい。

Ⅰ－③、II

教科指導については、今年３年目を迎える秋田北鷹高校の長谷川先生と一緒に第２期に模擬授業を行うこととなった。私と長谷川先生は専門科目が異なるため、模擬授業の際の単元を決めることでさえ苦戦をした。電話や農業クラブ活動などで会う機会をつくり、連絡を取り合いながら協力して授業をつくった。模擬授業当日、各教科の持ち時数は２５分、秋田北鷹高校の長谷川先生と分担して一人あたり１２分程度の時間しかなかった。同じ指導案の基、授業を行っても授業者の違いによって授業の進め方がまったく異なることを認識できた。他の教科の授業においてもやはり、授業者交代のタイミングで全く違った授業になっていた。先生方一人一人、個性をしっかりもっており、楽しく模擬授業に参加することができた。私も自分の色をしっかり出して授業をすることができるよう、今後も教材研究や研修を行い、授業力向上に努めたい。

５　最後に

初任研に続き、今回のような研修の機会をいただき、自らの資質・能力について考え、理解を深める機会をいただき大変感謝している。これまでの研修では授業改善が中心であったが、今回の研修では、組織マネジメントや担任としてのホームルーム経営など、組織の一員として自分の力を発揮していくために必要な知識や能力に関する研修が中心であった。教員としての資質・能力を身に付け、学校運営にも十分に携わる事ができる力を身に付けていなければならないと強く感じた。授業方法についても、今回身に付けたものを基に、新しいものを柔軟に取り入れ、様々な手法を場に応じて発揮できる力を身につけていきたいと思った。

教職５年目研修講座を終えて

教諭　三浦　　薫

１　はじめに

採用から５年目が経過しようとしている。この時期に求められる「マネジメント力」「生徒指導力」「教科指導力」それぞれの資質・能力の状況を把握し、自分の課題を意識しながら研修に参加した。

第Ⅰ期は東北高等学校対抗自転車競技大会が本県で開催され運営や引率のため欠席となり補充レポートの提出となった。今回の研修では教員として求められているものが自身の経験や社会情勢の中で日々変化し、担うべき役割が大きくなっていることを改めて強く実感する研修となった。

２　概要

目標	学校組織マネジメントの意識を高め、学習指導や学年経営、生徒指導についての実践的な指導力の向上を図る。	
Ⅰ期	6／14（金）	○生徒理解と人間関係づくり（講義・演習） ○学区組織の一員としてーマネジメントの視点ー（講義・演習） ○生徒の実態を踏まえた授業改善①（講義・協議・演習）
Ⅱ期	9／17（火）	○教師が使えるカウンセリングの技法（講義・演習） ○生徒の実態を踏まえた授業改善②（講義・協議・演習）

３　受講者　　教職５年目（高等学校）、教職５年経験者（高等学校６年目）

４　生徒理解と人間関係づくり（補充レポート提出の内容）

私たちは、見える世界（行動として表れている）と見えない世界（心の中）を持っている。見える世界は、考査の点数や成績順位等の結果であり、多くは見える世界で評価、判断をされる。生徒の行動は全てが「行動＝心」ではない。生徒同士の関係ではそのことを強く感じる。友人に嫌われたくない、仲間外れされたくないと「心とは逆の行動」をとることがある。嫌な気持ちであっても、友人には笑顔を見せてその場を乗り越え一人になって落ち込んでいるという場面がある。人は防衛反応として悲しいとき、苦しいときに笑顔を見せたり、大丈夫と発言したりする。私たち教師が、生徒に「心」や「思い」を相手の立場になって見ようとすることを伝えていかなければならない。本校でもグループ・エンカウンターを実施し、相手を尊重しながら、感情交流できる関係を育てている。また、毎日の学校生活では様々なことを抱えた生徒が、安全に安心して生活するためには普段の学校生活におけるルール（規則）、マナーを大事にする学校生活全般での生徒指導に心がけている。その中で気になる生徒に対しては声かけを行い、時に同じ目線に立った「視同」や、気持ちを受け止め良い方向へ導く「支導」を大事にしている。生徒も私たち教師も、考査の点数や成績順位だけでは判断してはならない。どのようにしたら生徒一人ひとりの変容をつかみ取ることができるか課題である。数字や結果に表れない貢献も沢山ある。その時こそ、適切に生徒を称える場面を増やしていくことが大事だと考える。それが、自信につながり、次も頑張るという行動に表れ、良い影響を与えることになると考える。

５　教師が使えるカウンセリングの技法

「話を聴く」ということについて、演習ではペアを組んで教師と生徒役になり与えられた台詞をもとに「話を聴く」ときの留意点についてのポイントを押さえながら、生徒の言いたいことを聴くことや、一段下の立場から話を聴くワンダウンポジションについての技法を学んだ。自身の声かけや働きかけ方について、改善すべき点を考えることができ、今後の学級経営において参考になる点が多々あった。

６　生徒の実態を踏まえた授業改善

Ⅰ期では、「実践レポートをもとに協議を行い、自分の強みや課題、課題の改善策を明確にする」ことをねらいとし、教科指導上の悩みや課題について発表し合い、それについて具体的な実践例や解決策を協議した。私は欠席となったため補充課題の提出となった。Ⅱ期でさらに実践報告、協議をすることで育成目標にある「生徒の実態を踏まえた補充的・発展的学習の適切な計画と実践」と「授業評価による継続的な授業改善」につなげていくことになる。

受講者は教職年数5年目と教職5年経験者(6年目)であるため､似たような問題や悩みを抱えていて、それを共有できたことが一番の成果だったと思う。Ⅱ期では、「生徒の主体性を高めたり、考えを深めたりする教材を用いた授業実践」の報告を10分程度のプレゼンテーションとして発表し合った。他の先生方の実践を見せてもらうことで、私自身の授業改善や新たな教授の手法などを学ぶことができた。

７　終わりに

教職５年目研修は、自身のこれまでの取り組みを振り返る良い機会となった。今回の研修内容を踏まえつつ、常に授業改善の意識をもち教員としての力量を上げるべく、日々の授業や業務等に臨んでいきたい。そして、私自身「学ぶことをやめたら、教えることをやめなければならない」という言葉を胸に、常に新しいことを学ぶのは、生徒だけではなく我々も同じなのだという意識を持ち生徒とともに成長していけるように今後も努力していきたい。

教職５年目研修講座を終えて

教諭　風登　友美

１　はじめに

初任者研修を受けてから、早いもので５年目を迎えた。採用１年目に比べると自分の授業方法を確立できてきており、その他の分掌も見通しをもって取り組むことが出来ているように感じる。

秋田県では「キャリアアップシート」の活用を推進している。それに照らし合わせてみると教職５年目は第２ステージ「実践的指導力向上期」に当たる。「実践と改善」を繰り返し、自らの資質向上に向けて主体的に研修に取り組みたいと感じた。その研修の内容と成果を以下に記していきたい。

２　概要

①研修名　　教職５年目研修講座（高等学校）

②研修の目標　学校組織マネジメントの意識を高め、学習指導や学年経営、生徒指導等についての実践的指導力の向上を図る。

③研修の内容

期	日　　時	研　　修　　内　　容
Ⅰ	６／１４ （金）	○生徒理解と人間関係づくり（講義・演習） ○学校組織の一員としてーマネジメントの視点ー（講義・演習） ○生徒の実態を踏まえた授業改善①（講義・協議・演習）
Ⅱ	９／１７ （火）	○教師が使えるカウンセリングの技法（講義・演習） ○生徒の実態を踏まえた授業改善②（講義・協議・演習）
携行品		全期：担当教科の「高等学校学習指導要領解説」（平成３０年、文部科学省） Ⅰ期：授業改善や教科指導上の課題に関する資料等 「学校要覧」等自校の教育計画 Ⅱ期：学習指導案 成果と課題の報告に必要な資料・レポート

３　研修内容

Ⅰ－①　生徒理解と人間関係づくり

生徒理解や人間関係づくりに関する研修や演習を行った。「教師から見て困った生徒は困っている生徒である」ということがとても印象に残った。生徒から発信されている困ったことを的確に受け取り、まずは生徒に寄り添ってみようと思った。SGE についても説明されており、本校でも２年ほど前から行っているが、実際に自分でも体験してみて、自分の意見が受け入れられる心地よさと他者の意見に共感する大切さを改めて実感することができた。

Ⅰ－②　学校組織の一員としてーマネジメントの視点ー

学校要覧をもとに保護者に自校の紹介をするという演習を行った。本校の教育目標を保護者に説明するように噛み砕きながら説明することで、学校の目指す姿がよく見えてきた。大曲農業高校の一員として、しっかりとそのことを理解し、日々の職務に取り組んでいくことが大切だと感じた。マネジメントと聞くと難しいイメージがあったが、この講義でその意味をしっかりと確認することができた。

Ⅰ－③　生徒の実態を踏まえた授業改善①

生徒の実態を踏まえた授業改善について、福祉科の教員と各々の課題について協議を行った。私は、「問題解決のプロセスを重視した授業展開についての工夫と実践上の課題」をというテーマから自身の授業を見つめ直した。以下に私の挙げた課題を示す。

テーマの視点から自身の課題として①教師の介入の仕方と②内容の精選についての２点が上げられた。①について生徒の主体的な活動の中で、教師の介入はできるだけ少なくしたいが、教示や説明に時間を割きすぎてしまい、肝心の生徒の活動時間が少なくなってしまうことが多々ある。また、指示がうまく伝わらず、作業がスムーズにいかない場面も見られる。机間指導等で補っているが、いかに最初の指示を的確に分かりやすく説明するかということが課題である。

②については、作業内容が多く、生徒に振り返りの時間を多く取らせることができず、授業の導入部分をフィードバックすることが十分にできていないときがある。問題解決のプロセスにおいては、このフィードバックする反省・評価の時間がとても重要だと考える。しかし、実際は時数に追われ、内容を詰め込み過ぎた授業になってしまうことが課題である。

協議を通して、①と②の課題をさらに突き詰め、最終的に課題を「授業内で指示や作業等内容を詰め込み過ぎず、問題解決のプロセスの見直しを図る」と設定した。自分の授業に対しての課題がさらに明確になり、また福祉科の先生方の取り組みが実践を伴い、生徒主体の活動のものが多く、大変参考になるものであった。今後は新学習指導要領をしっかりと読み込み、Ⅱ期に向けて授業改善が図れるよう研究と修養を重ねていきたい。

Ⅱ－①　教師が使えるカウンセリングの技法

カウンセリングの技法に関する研修や演習を行った。カウンセリングの技法はいくつか知っているものもあったが、改めて詳しく技法を知ることが出来た。実際にそれらの技法について台本を用いてロールプレイングをし、生徒の気持ちに寄り添ったカウンセリングでは、どんどん自分の意見や考えや思っていることを伝えることができ、身をもって傾聴の大切さを学ぶことが出来た。私は前から、相手から相談を受けるときは｢何かためになるアドバイスをしなければ｣とよく考えてしまいがちで、相手の話を聞きつつも自分自身が話すことも多くなってしまうことがある。今後は生徒から相談を受けたら、まずはその話に耳を傾け、気持ちを引き出すような工夫をしたいと思った。

Ⅱ－②　生徒の実態を踏まえた授業改善②

Ⅰ期での課題解決に向けた授業案の作成と実践報告を行った。自身の課題は「授業内で指示や作業等内容を詰め込み過ぎず、問題解決のプロセスの見直しを図る」と設定した。改善策としては、「振り返りを充実させるためＰＤＣＡサイクルに当てはめた授業の流れを提示する」｢生徒の考えを引き出す（考えさせる時間を持たせる）ために、教師は待つ姿勢を持つ」とした。授業実践では、効果的に生徒に見通しを持たせることが出来なく、さらに課題が残ったが、改善方法を他の先生方と協議でき、今後の授業で活かしていこうと感じた。他の先生方の実践では、生徒に考えさせたい諸問題を視覚的に訴えたり、グループワークにおける指示が分かりやすかったり、ぜひ今後の自身の行う授業にも取り入れていきたいものばかりであった。

５　最後に

今回の研修を受け、実践的指導力の向上のためには、日頃の自らの指導を振り返り、課題を見つけ、実践し、改善していく事が大切だということを改めて感じることができた。また、自分の強みや弱みを再確認できたので、日々の教員生活に活かしていこうと思う。今回も秋田県総合教育センター指導主事部谷靖子先生を始め、たくさんの先生方からご指導を頂くことが出来た。このような貴重な研修の機会を頂けた事に感謝し、今後も研究と修養を重ねていきたい。

実践的指導力向上研修講座（高等学校８年目）を終えて

教諭　佐々木　梢

１　はじめに

３年目の研修時に当時の８年目の先生方と一緒に研修を行う場面があったが、あれから５年立ち、今回の研修内容と当時の研修内容はまったく異なっている。中堅教員としての学校経営への参画、生徒指導力やホームルーム経営力の向上はもちろんのことだが、やはり新学習指導要領の実施を控え授業や評価の在り方が変化していくなかで、教師として変化に対応する力が求められていることを強く感じた研修であった。

２　概要

①研修の目的

自己理解に基づき、個々の個性・適性、分掌等に応じた資質能力の向上を図る。

②研修の内容

期	日　　時	研　　修　　内　　容
Ⅰ	７／　５（金）	○事例を通した生徒理解と対応 ○学校組織の一員として－自己理解に基づく目標設定－ ○カリキュラム・マネジメント
Ⅱ	９／２０（金）	○授業評価による継続的な授業改善

３　研修の中から

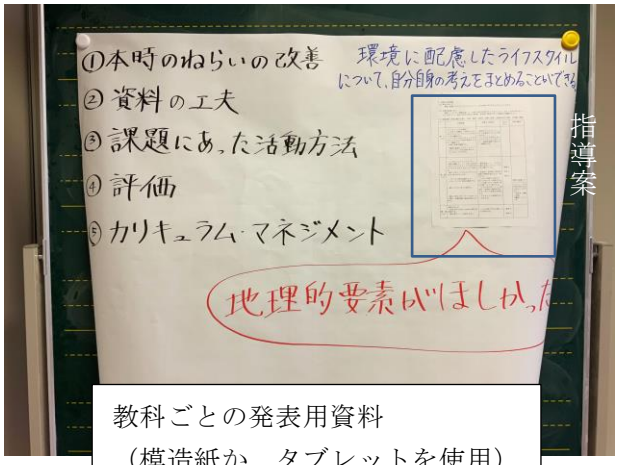
①事例を通した生徒理解と対応

演習として仮想事例（身体症状を訴え、欠課を繰り返す生徒）を各自分析し、アセスメントシートに整理しながら対応を協議した。同じ事例であっても それぞれの勤務する学校状況、これまでの経験など視点が異なれば、自分自身が注目しなかった点から新たな生徒の状況も考察でき、手立て（対応）にも選択肢を増やすことができる。改めて個ではなく組織で生徒対応にすることの重要さを感じることができた。

アセスメントシート
情報の収集・整理→理解・解釈→手立

②授業評価による継続的な授業改善

各教科に分かれ、各自持ち寄った指導案の中から一つを選んで全員で協議し、修正を行った（地歴公民科は地理Ａの学習指導案を選択）。身近な事柄（ペットボトルごみの現状）から環境に配慮したライフスタイルについて自分自身の考えをまとめることをねらいとして行った授業であったが、協議の中でこの題材は地理で取り扱うべきものか、という意見がでた。「カリキュラム・マネジメント」の校内研修会で取り組んだ研究授業であったということもあり、授業者は他教科の関連を意識しな



教科ごとの発表用資料
（模造紙か、タブレットを使用）

がら指導案を作成し、授業を行った。しかしそのため授業の中に「地理的要素」が欠けているという結論に至り、グラフや地図を活用して他国との比較を取り入れるなど資料の工夫や自分の考えをまとめるではなく「改善策を考えることができる」などねらいの改善などが修正すべき点としてあがった。

カリキュラム・マネジメントは今回の研修で大きく取り上げられた内容であり、実際に今後取り組まなければならない課題でもある。他教科と関連づけられる汎用性を持たせつつ、その教科・科目で学ぶ意義、教科・科目の特色を出すことの難しさを感じた。

４　最後に

前述の通り、今回の研修は新学習指導要領の実施を意識した研修内容であったように感じている。最後に研修から今後の授業評価、授業改善について二点紹介したい。

①カリキュラム・マネジメント

改訂の方向性として、よりより学校教育を通じてよりより社会を創るという目標を共有し、社会と連携・協働しながら、未来の創り手となるために必要な資質・能力を育むための「社会に開かれた教育課程」を実現するために、各校における「カリキュラム・マネジメント」の実現が必要であることが示されている。

学校の目標（育成したい生徒像）に基づいて、育成したい資質・能力をどの教科科目の、どの単元（場面）で育成するかを計画し、そこで生徒の変容を見える形で評価し、その評価に基づいて授業を改善していく。　計画（Ｐ）から始めるのではなく、評価（Ｃ）から始め、改善（Ａ）し、それに基づいて計画（Ｐ）し、実施（Ｄ）する。これを繰り返し、学校全体で学習活動の質を向上させていく。

②授業評価による継続的な授業改善

・「Akitaractive Eye」を活用した授業評価　総合教育センターＨＰ（各班のページ→教科・研究班）

・新たな学びに関する教員の資質能力向上のためのプロジェクト　次世代型教育推進センターＨＰ

研究授業や互見授業において、どこに着目して見て欲しいのかという明確な視点がなければ、せっかくのアドバイス（授業評価）も意味がない。
深い学びにつなげるためには振り返って次へつなげるフィードバックが重要になってくる。

※学習評価の在り方ハンドブック（国立教育政策研究所教育課程研究センター）　令和元年６月

今後は５段階評価に加え、新観点（知識・技能、思考・判断・表現、主体的に学習に取り組む態度）に基づいた総括評価をＡＢＣで記録することになる。テストの点数のように明確に生徒に説明できる規準の設定と、総括するための評価の記録も必要になる。

大学入試においても高校における「主体性」の評価を合否判断にいれる大学も出てくるため、これまでのような平常点的運用ではおそらく通用しなくなる。

中堅教諭等資質向上研修を終えて

教諭　加納　綾子

（１）はじめに

年次研修の最終段階である本研修に参加し、採用からこれまでの自身の教員生活を振り返るよい機会を得ることができた。また、これから学校のためにどのような力をつけて携わっていくべきなのか、教員としての私自身のキャリアをどのようにデザインしていったらよいのか、そのために現在の自分に不足している部分は何かを改めて認識することができた。ここでは、総合教育センター主催の一般研修、高校教育課主催の授業研修について報告したい。

（２）一般研修

Ⅰ期では総合教育センター所長より「教育は未来を育てる、夢を育てるものである。そのために、我々は夢に向かって挑戦できる人間を育成する。」という講話をいただき、改めて教育に携わる人間としての使命と責任の重さを感じ、身の引き締まる思いがした。授業研究の講義では、秋田大学の阿部昇特別教授より「主体的・対話的で深い学び」「探究型授業」について御指導いただいた。探究型授業を創り出すには教材研究力、目標設定力、授業構築力の３つの力が大切であることを具体例を交えて教えていただき、探究型授業のイメージを持ちやすくなった。Ⅳ期ではキャリア教育についての講義・協議が行われ、キャリア教育を通して主体的に学習に取り組む態度を養うことが大切であると学んだ。なぜ学ぶのかが分かっている子ども、学んだことが役立つと分かっている子ども、教室での学びと実社会とが結びついていると分かっている子どもを私たちは育てていかなければいけないと実感した。Ⅴ期では閉校式において、今後の長い教員生活を生きるために「学び続ける術」を身に付けること、「仲間と共に成長する教師」であることが大切であるという講話をいただいた。自分の実践を常に省察するとともに新しいことに挑戦し続けること、困難を跳ね返すだけの力を身につけながら成長していく力を養っていくことを今後の教員生活で意識していきたい。

（３）授業研修（生物基礎）

期　日	令和元年９月２日（月）２校時
会　場	秋田県立秋田高等学校
対　象	１年Ｂ組３５名
単元名	第２編　生物の体内環境の維持　　第３章　生物の体内環境　　第３節　生体防御

授業研修では、ジグソー法を用いて免疫の初回の授業をさせていただいた。免疫に関わる細胞や免疫の仕組みを生徒がまとめ、それらを互いに発表し合い、最後に問題演習に取り組む流れで行った。初対面にもかかわらず、生徒たちが意欲的に授業に参加してくれたおかげで活発な授業とすることができた。まとめた内容を互いに発表し合う場面では、発表者は工夫しながら言葉や図を使って説明することができており、聞く側の生徒は納得のいくまで質問しており、生徒の学ぶ意欲の高さに驚かされた。しかしながら、授業の流れの説明不足や計画の甘さがあったことが反省点となった。この１時間の授業で生徒に何を身につけさせたいのかよく考えた上で目標を絞り、授業の計画を錬っていくことの大切さを改めて実感した。生徒がじっくりと考えることができる授業、そして協同的に学び合うことができる授業を今後も意識して実践していきたい。

（４）おわりに

他校の先生方との協議や実践報告などを通して、教科指導や学校・学級経営について新たな気づきも多く、毎回学ぶことが多い研修であった。選択研修や校内研修についても、他の機関および多くの先生方のご協力のお陰で有意義な研修とすることができた。そして、日々の授業を通して多くのことを教えてくれる生徒たちがあってこその本研修であったと感じている。このような研修の機会をいただけたことに感謝するとともに、研修で学び身に付けたことを生徒や学校に還元していくために、中堅教諭としての自覚を持ち今後も研鑽を積んでいきたい。

第４回全国高校農業教育研究協議会　資源活用・ヒューマンサービス部会（報告）

教諭　小松　国子

期　　日：令和元年８月５日（月）～６日（火）
場　　所：松阪フレックスホテル
事 務 局：三重県立明野高等学校
大会日程：８月５日（月）

１３：００～	開会行事	
１３：３０～	総会	
１４：０５～	研究発表 「三重県の食品科学分野における教育の実践と課題」～地域資源を活用した商品開発と地域交流～ 発表者：三重県立明野高等学校　　教諭　平尾　岳之 助言者：三重県立久居農林高等学校　校長　長谷川　博文	
１４：５０～	【第１分科会】（生活科学・ヒューマンサービス系） 「生活科学科の特色を活かした地域と繋がる教育活動について 発表者：愛知県立半田農業高等学校 教諭　吉川　真未 助言者：岐阜県立加茂農林高等学校 校長　村井　真	【第２分科会】（資源活用・食品系） 「当面する課題と特色ある教育について」～地域資源を活用するブランドの開発 発表者：岐阜県立大垣養老高等学校 教諭　間世田　雄人 助言者：愛知県立半田農業高等学校 校長　橋本　具征
１５：２０～	指導講評 文部科学省初等中等教育局　参事官（高等学校担当）付産業教育振興室　教科調査官 国立教育政策研究所　教育課程研究センター　研究開発部　教育課程調査官 鈴木　憲治　様 「農業高校の現状と農業教育」	

８月６日（火）

９：００～	【第１分科会】（生活科学・ヒューマンサービス系） 研究協議	【第２分科会】（資源活用・食品系） 研究協議
９：３０～	講演 「地方創生時代の企業経営」 講師：株式会社マスヤグループ本社　代表取締役社長　浜田　吉司　様	
１１：１０～	分科会報告	
１１：４０～	閉会行事	

＜研究発表について＞

食品科学科の取組として､｢イチゴジャムの製造｣､｢茶のＧＡＰ認証取得｣､｢ローソンとの商品開発｣、「三重県内農業高校実習製品の紹介」及び「食育活動（幼稚園児との取り組み)、(小学生との取り組み)」が紹介されました。地域の農産物を活用した製品をつくり、付加価値を付けた上で地域の人たちに還元することで、単なる物づくりではなく、地元農家の意欲向上や地域の活性化につながっていることを生徒達が実感できていると報告されました。また、ＧＡＰ認証や商品開発など、新しいことに

挑戦することが、生徒の成長に繋がっているようでした。今後の課題として、高齢化に伴う農家の減少や、少子化による学級減の影響で、これまで取り組んできた内容を従来通り維持していくことの難しさや、授業と実習のバランス、資格取得など生徒のやる気を引き出す教育課程の検討が必要だと発表されました。

＜分科会発表【第１分科会】について＞

生活科学科として「農業科と家庭科の連携」及び「地域との連携」についての取組が発表されました。「食生活」分野での連携は過去にもあるが、「衣生活」分野での連携という新たな取組について紹介されました。「知多木綿」という伝統工芸に着目し、卒業生から寄贈された機織り機を稼働させた。課題としては伝統工芸であるが故に、知識や技術の伝承が難しいことがあげられました。現在は知識が豊富な職員と地域の方の協力で軌道に乗り始めているが、今後は後継者不足が深刻な問題となっていくことが想定されます。「学校」と「地域」、「農業科」と「家庭科」が連携する魅力的な学びを、今後も続けていきたいという発表でした。

＜指導講評＞

農業高校の現状（学科構成）について

生活科学関係は減って、食品科学関係が増加している。進路状況を見ても関連産業への就職は食品関係が増えている。

新学習指導要領について

主体的な学びの視点の中の、【～見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習を振り返って次につなげる「主体的な学び」ができているか。】は、つまり自己調整能力と考えて良い。農業科の改訂の基本的な考え方として、「地域や社会の健全で持続的な発展を担う職業人を育成する・・・・」が重要である。専門教科・科目の最低必修単位数は２５単位以上。分野構成の食品製造や食品流通では「食品微生物」が重要。学習内容の改善・充実として、「農業経営」及び「食品流通」でマーケティングに関する学習内容を充実し、「作物」、「野菜」、「果樹」、「草花」及び「畜産」などにおいて、起業や六次産業化に関わる内容を扱うことを明記した。また、ＧＡＰやＨＡＣＣＰに関する学習内容も充実させる。「グリーンライフ」は地域資源に関する学習の充実を図る視点で整理し、「地域資源活用」に名称変更。学習指導の改善・充実のために、『プロジェクト学習』を関係する科目の導入部分に設定した。実践的な学習活動や就業体験を積極的に取り入れるとともに、社会人講師を積極的に活用した学習活動の充実を図る。

学習評価について

「生徒の学習改善」及び「教師の指導改善」につながるものに変えていく。必要性・妥当性が認められないものは見直していく。観点別評価の充実については、三段階の評価を指導要録へ記載するようになる。

その他

ＨＡＣＣＰについての対応。「農福連携」という言葉には二つのとらえ方があるので、理解する。食品、ヒューマンサービスは地域とのかかわりの機会が多いので、新しい学習指導要領を踏まえ、どのような力を身に付けさせるかを考えて、生徒の指導や評価につなげていく。

＜研究協議【第１分科会】について＞

職員の異動によって、課題研究などで、「できるもの」、「できないもの」が出てくる。地域と連携したくても、高齢化が進み相手先が難しい。教員不足や意識の違いがある。多くのことを引き受ける職員は、遅い時間まで残り、土日も出勤している。校内で作ったものを販売したいが、量が少ないので難しい。

＜講演について＞

「おにぎりせんべい」で有名なマスヤグループ社長の講演でした。地域についてのとらえ方や「一人前になること」など参考になる話がありました。マスヤグループの社訓には、一人前の「三つの条件」として「経済の自立」、「意思の自律」及び「信用」があるそうです。「自分らしい力（非凡な力）」を使って、「人に喜んでもらえること」が、人として一番の幸せだという考えをお聞きすることができました。２１世紀の新しい組織の形という話も印象的でした。

令和元年度　学校農業クラブ指導者養成講座に参加して

教諭　三浦　　薫

１　目　　的　　高等学校における農業クラブ活動とその運営について必要な知識と技術を習得させ、指導者としての資質の向上を図り、もって高等学校における農業クラブの充実に資する。

２　主　　催　　文部科学省・全国農業高等学校長協会
日本学校農業クラブ連盟

３　対 象 者　　各単位クラブで農業クラブに主となって携わる教員　　６３名

４　期　　日　　令和元年８月７日（水）～８月９日（金）

５　会　　場　　独立行政法人　国立オリンピック記念青少年総合センター
センター棟５０１号室、４０９号室
〒151－0052　東京都渋谷区代々木神園町3－1　TEL03－6407－7703

６　講 義 Ⅰ　　題目　「新学習指導要領と学校農業クラブ」　　鈴木　憲治　氏
文部科学省初等中等教育局参事官（高等学校担当）付
産業教育振興室教科調査官
国立教育政策研究所教育課程研究センター教育課程調査官

新しい時代に向けて「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る」という目標を学校と社会が共有し、連携・協働しながら、新しい時代に求められる資質・能力を子供たちに育む「社会に開かれた教育課程」の実現を目指し指導要領が、学校、家庭、地域の関係者が幅広く共有し活用できる「学びの地図」としての役割を担っている。新学習指導要領は何を目指し、農業教育学校、農業クラブ活動はどうあるべきか、その方向性を指導していただいた。

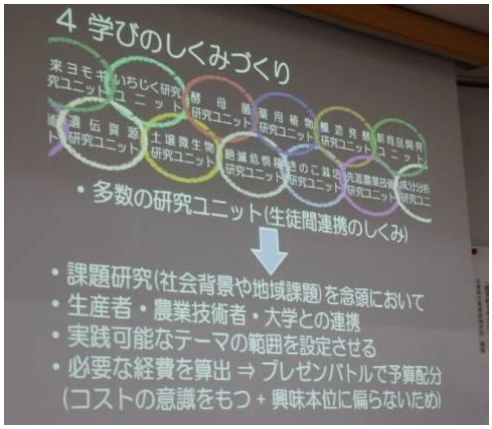
７　講 義 Ⅱ　　題目　「学校農業クラブの運営について」

日本学校農業クラブ連盟専門部による講義では「学校農業クラブの運営について」、全国大会実施種目を中心に、それぞれの競技会での狙いや留意事項について説明があった。全国大会実施基準は指導要領に基づいてつくられおり、競技のためだけではなく普段の学習に実施基準の内容を取り入れながら活用していく必要があると感じた。特に農業鑑定競技会の実施基準に書かれている用語については、各教科で最低限身につけるもので、授業で取り扱ってほしいという内容であった。

８　研究協議Ⅰ　事例研究発表

テーマ　「探求的な学びのしくみづくり」

発表者　　兵庫県立農業高等学校　　教諭　今村　耕平　氏



兵庫県立農業高等学校の今村耕平先生から「探求的な学びの仕組み」について、発表を聞くことができた。2年連続プロジェクト発表会での最優秀賞やアグリマイスター制度の最優秀生徒を育てている学校の指導について貴重な話を聞くことができた。プロジェクト活動の発表では、視覚的な構成と発表者の文章表現について、自己満足せず誰にでも分かることを意識し『伝わる発表』を心がけて指導している内容であった。また、学科に設置した３類型に直結した３つの研究会を設定しており、これは生徒たちが高校入学後、早い段階でその探究心を受けとめるしくみをつくる考えで、先生の監督のもと上級生が下級生を指導していくユニット制を取っていた。理化学研究所の研究チームを真似てつくりあげたものだという。研究テーマごとにユニットという単位で構成し、リーダーのもと他のメンバーが助け合い、それぞれがリーダーでありメンバーである。この仕組みが毎年新しいテーマでプロジェクト発表を行う仕組みであると教えていただいた。

９　研究協議Ⅱ　事例研究発表

テーマ　「日本学校農業クラブ全国大会鹿児島大会を終えて」

発表者　　鹿児島県立鹿屋農業高等学校　　教諭　熊埜御堂　宏一　氏

熊埜御堂氏からは、昨年度の全国大会鹿児島大会について話をいただいた。運営担当校１１校のうち離島２校除く９校で各競技を担当し、運営担当の合い言葉は「全国から参加するみなさんに満足していただくおもてなしを」でスタートした。しかしながら事務局で各競技の情報を収集していく中で、知れば知るほど業務が増え、会議を重ね、話し合いを繰り返し、資料づくりに追われ…、全国大会の恐ろしさを実感したと本音を話された一方で、運営生徒にとっては「生涯経験できないことができる場や準備の成果を出し切る場」となり生徒の成長を大きく感じることができた大会となったという内容であった。また、熊埜御堂氏自身も、たくさんの方と交流を持つことができ、様々な業者とのやりとりを学ぶことができた。更にはチームプレーの有り難さを実感でき適材適所の発見や協力体制の確立など多くのことを学ぶことができた大会だったと振り返っていた。

１０　研究協議Ⅲ　　各分科会　及び　全体会

第１分科会　テーマ「授業で取り組むプロジェクト活動」

第２分科会　テーマ「単位クラブにおける学校農業クラブ活動への活性化にむけた工夫」

私を除く５名の先生方と「単位クラブにおける学校農業クラブ活動への活性化」をテーマに協議を行った。
事前提出したレポートをもとに、各校の現状と課題を協議していき、課題を２つあげ対策を考えるという内容であった。どの学校でも「入学生（農業クラブ員）の確保に苦労している」という共通点があり課題１とした。

また､各学校で多様な生徒が入学している現状があった。スポーツに優れている生徒、学力の高い生徒、自信の持てない生徒、勉強の苦手な生徒、支援が必要な生徒と様々であり、一つの学校の中で農業クラブの全国大会入賞者がいる一方で農業クラブと自分たちは関係ないとの意識の低い現状があり、学校全体を良くしていくためには、一部の生徒が活躍するのではなく、多様な生徒達の力を伸ばしていくことが必要であると考え｢農業クラブと他の活動の両立」を課題２として協議を行った。
単独校であっても、統合校でも他の学科や他の教科を超えた理解や協力があってこそ学校に活気が出て、生徒の意欲も高まることになる。教職員のチームワークが生徒にとっては落ち着いて学習に取り組む一つのポイントとなった。
学校内のチームワークがより魅力ある学校につながると確認できた。

最終日には、分科会で協議したものを模造紙にまとめ、班ごとに発表をする全体会を行った。

１１　指導講評　　文部科学省初等中等教育局参事官（高等学校担当）付
産業教育振興室教科調査官
国立教育政策研究所教育課程研究センター教育課程調査官
鈴木　憲司　氏

農業クラブは特別な仕事としてとらえるのではなく授業の中にあるもの。農業に興味ある生徒はどれぐらい学校にいるか。必ずしも全員が明確に目標を持っている生徒ではなく、むしろ一握りかもしれない。何も知らない生徒に農業の楽しさや農業の可能性を教えるのは、我々。
分科会でも多忙化というキーワードが出てきましたが先生方が楽しめていないと生徒達が楽しめない。負担感、疲労感を感じている中このような先生になろうとする生徒はいるであろうか。効率化、データの共有、分担化など何かしらの工夫が必要であるという話をしていただいた。

１２　まとめ

新学習指導要領ではプロジェクト学習が重要な位置づけとなった。なぜプロジェクト学習がより重要な位置づけとなったのか、この機会に深く考えることができた。学んだことを生徒に還元するためにも、もう一度授業の内容についても振り返りたい。レポートの作成では丹指導主事を始め、多くの先生方にご指導いただきました。深く感謝申し上げます。

学年部の取り組み（１年部）

１年主任　平塚　祥広

１．学年の概況　　平成３１年４月末日現在

	農業科学科 A	農業科学科 B	食品科学科 F	園芸科学科 E	生活科学科 H
男子生徒数	２３	２３	１６	１３	０
女子生徒数	１０	９	１９	９	３３
クラス合計	３３	３２	３５	２２	３３
学科合計	６５		３５	２２	３３
出身中学校	大曲（37） 大曲西（1） 大曲南（5） 平和（6）	西仙北（9） 協和（9） 仙北（9） 中仙（5）	太田（8） 豊成（1） 南外（3） 美郷（22）	角館（5） 生保内（6） 神代（9） 桧木内（1）	西明寺（2） 横手北（1） 横手南（2） 横手明峰(5)	御野場（3） 河辺（1） 湯沢北（3） 羽後（2）

２．学習・進路について

（１）朝学習・補習

朝学習は国語・数学・英語・農業および北斗星の書き写しを実施した。基礎学力の定着だけでなく、字を正確に早く書写することによって３年後の進路活動へ結び付けたいと考えた。朝学習は学年部職員の丁寧な指導によって定着し、遅刻生徒の減少に結びついている。

補習は長期休業中を中心に他学年と協力して実施した。進学意欲の高い生徒を育成し、４年制大学や看護・医療分野への動機づけに有効であり、公務員講座については生徒一人ひとりの意識づけにつながっている。

（２）ポートフォリオの活用

入試制度改革を踏まえ、学習活動や特別活動の記録を行うためにベネッセの「マナビジョン」を導入した。４年制大学を中心にＡＯ入試が増加しており、自己ＰＲなどのプレゼンテーション能力を育成するためにもそれぞれがどのように考え、学校生活を送っているのか振り返りながら記録していく環境づくりが必要になると考えている。

（３）進路ガイダンス

進路希望調査をもとに１２月に進路分野別ガイダンスを実施した。ライセンスアカデミーの協力を得て、全体会では進学・就職に必要なお金について講義を行った。マネー講座は６月の学年ＰＴＡにおいても保護者を対象に実施しており、生徒・保護者に共通の説明をすることができた。

３．生活・生徒指導面について

（１）学校生活全般について

健康教育部の協力で定期的にＳＧＥを実施することができ、生徒間の関係性を良好に保つことができた。早苗振や大農祭などの行事を重ねることでクラス内の目標を統一することができたように考えている。

（２）生徒指導上の課題について

ＳＮＳによるトラブルなどが絶えず、その把握と解決に苦慮した。スマートフォン使用時のマナー順守について指導は継続的に行うべきである。今年度は生徒指導部が中心となってＳＮＳ使用の講習会を実施してくれたことは大きな成果である。

Ｗｅｂ動画などの普及により、物事の善悪について判断を誤る機会が見られる。特に集団化した場合にトラブルにつながる場面があった。一つ一つの行為が今後どのように捉えられるかなど、倫理観を指導していく必要性も感じている。

４．次年度の課題について

（１）倫理観の醸成と自己肯定感の育成

自らの行為が第３者にどのように見られ、捉えられるかを考えながら行動に移すことができるよう日々の指導を行っていく。

（２）修学旅行およびインターンシップをとおした進路意識の向上

インターンシップ・修学旅行をとおして自己の進路目標を明確化させ、次年度へ向けた活動を本格化する。

学年部の取り組み（２年部）

２年主任　古瀬　利彦

１　学年の概況

在籍数は昨年度３月に１名退学し、４月以降１７４名のままである。また、進路希望は、令和元年１２月末時点で、大学・短大４４名、専門学校５０名、民間就職６１名、公務員１６名、就農３名である。

２　学習・進路面

（１）【週末課題】本年度から導入した「スタディサプリ」（(株)リクルート）を利用し、英語と数学の課題を毎週金曜日に配信した。週末忙しい生徒のため、２学期途中からは月曜日に配信し、１週間かけて課題に取り組めるようにした。課題の範囲は、長期休業明けの「到達度テスト」の出題内容に合わせた。テスト後は、解けなかった項目を個別に配信できる「連動課題」を数週間配信した後、次の長期休業明け「到達度テスト」の出題範囲から配信した。未提出者には、放課後に情報処理室で配信課題を提出させたが、２学期途中から、より時間を要する紙媒体で提出させるようにしたところ未提出者が減った。また、公務員希望者には、スタディサプリの動画を利用して学習するための課題を配付した。

（２）【朝学習】スタディサプリによる配信課題の類題である「チェックテスト」を利用し、週末課題の復習をさせた。曜日の割り振りは、（月）チェックテスト（数学）、（火）チェックテスト（英語）、（水）国語、（木）農業、（金）小テストの勉強（農業か英語）とした。月曜日と火曜日は、朝のＳＨＲでチェックテストの答え合わせをした。

（３）【進路ガイダンス】１２月１８日（水）３校時～６校時に実施した。進学は、大学・短大、専門学校に分け、志望理由書の書き方、面接練習などを行った。民間就職は、例年ハローワークから紹介のあるガイダンスを２～６校時に行っていたが、本年度は、３、４校時に面接練習、５、６校時は各種民間企業に就職した本校卒業生に来校してもらい、生徒との懇談会（１人３社）を実施し、メリハリのある内容にした。公務員は、ガイダンスと試験問題演習（適性検査を含む）を行った。

（４）【一般常識】生徒に一般常識ドリル（実務教育出版）を４月に配付し、一般常識チェックテストを年３回計画した。チェックテスト当日にドリルを回収し、採点は学年部職員全員で分担して行った。チェックテストで５００満点中２００点に満たなかった生徒は、放課後に復習課題をやらせた。また、上位者一覧をロッカースペースに掲示した。

３　生活・生徒指導面

（１）スマートフォンについて、「他の人も使っている」ことが前提とならないよう、４月当初に「スマホ校内使用禁止」という紙を各教室に掲示した。

（２）ＳＮＳの使い方に関わる問題が発生した。学年集会で、事実と違う噂が広まらないよう訴えた。ＳＮＳの危険性について、機会があるたびに繰り返し注意を促した。

（３）アンガーマネジメントの講習会を年２回実施した。（農業科学科）

（４）生活面で問題がある生徒は、部活動・保護者と連携して対応した。また、授業等で言動が気になる生徒に対し、職員室でも注意するようにした。

４　課題、次年度に向けて

生徒は経験から学び、多かれ少なかれ次の行動にそれを生かしていると感じている。進路活動を通して、来年度も大きく成長することを願いつつ、指導していきたい。

学年部の取り組み（３年部）

３年部主任　山本　　力

１．卒業生数と進路

全日制課程	卒業者数	進学			就職			就職・自営
		四年生大学	短期大学	専修学校等	県内	県外	公務員	
農業科学科	６７	１０	４	２６	２４	１	１	１
食品科学科	３５	３	５	１２	１２	１	２	０
園芸科学科	３５	８	３	１１	１０	１	２	０
生活科学科	３５	０	１２	１７	３	３	０	０
計	１７２	２１	２４	６６	４９	６	５	１

【国公立四大】	秋田大学　　秋田県立大学（２）
【私立大学】	ノースアジア大学（３）　　相模女子大学　　城西大学（２） 湘南工科大学　　清和大学（２）　洗足音楽大学　　中央大学 帝京平成大学　　東北工業大学　　東北生活文化大学 新潟食料農業大学　八戸工業大学　　盛岡大学　　酪農学園大学
【短期大学】 県内	秋田栄養短期大学（２）　　聖霊女子短期大学（７） 日本赤十字秋田短期大学　　聖園学園短期大学（５）
【短期大学】 県外	会津大学短期大学部　　秋草学園短期大学（２） 仙台青葉学院短期大学　東北生活文化大学短期大学部（３） 盛岡大学短期大学部
【専門学校等】 県内	秋田技術専門校（３）　　秋田県歯科医療専門学校 秋田市医師会立秋田看護学校（２） 秋田情報ビジネス専門学校（２） 秋田しらかみ看護学院（２）　秋田リハビリテーション学院（２） 秋田林業大学校（３）　　大曲技術専門校（８） 大仙市新規就農者育成研修生　鷹巣技術専門校 劇団わらび座養成所

【専門学校等】 県外	日本軽種馬協会生産育成技術者研修生　岩手県立農業大学校（２） 大原スポーツ公務員専門学校盛岡校　　北日本医療福祉専門学校 北日本ハイテクニカルクッキングカレッジ 盛岡医療福祉専門学 校（２） 盛岡外語観光＆ブライダル専門学校（２） 盛岡公務員法律専門学校　　盛岡情報ビジネス専門学校 盛岡ペットワールド専門学校　　仙台医療秘書福祉専門学校 仙台ウエディン グ＆ブライダル専門学校 仙台カフェ・パティシエ＆調理専門学 校（２） 仙台工科専門学校　　仙台こども専門学校（２） 仙台スイーツ＆カフェ専門学校　　仙台保健福祉専門学校 仙台 リゾート＆スポーツ専門学校（３） 東北動物看護学院　　東北保健医療専門学校 宮城調理製菓専門学校　宮城文化服装専門学校 東京アナウンス学院　　東京コミュニケーションアート専門学校 東京調理製菓専門学校　東京ビューティーアート専門学校 東京ベルエポック美容専門学校　　トヨタ東京自動車大学校 バンタンデザイン研究所　　文化服装学院　　真野美容専門学校 目白ファッションアートカレッジ
【県内就職】	秋田県醗酵工業（株）　（株）秋田今野商店　（株）秋田ルミ ナ 朝場畜産　　アネスト岩田（株）（２）　　エイブリック（株） 大曲エンパイヤホテル　　大曲自動車学校　　川連運送（株） 興栄建設（株）（２）（有）佐々木農場　三共光学工業（株）（２） 昭和コンクリート工業（株）　　生活協同組合コープあきた Ｔａｋａｍｉｔｕ（株）　（株）タカヤナギ　（株）瀧神巧業 （一社）大仙市学校給食協会（２）　　（株）タニタ秋田（２） （株）タニタハウジングウェア　　ＴＤＫ秋田（株）（２） トヨタカローラ秋田（株）（２）　ナガイ白衣工業（株）（２） 西仙北ぬくもり温泉ユメリア（２）　　（株）農匠 （株）花火創造企業（２）　　日立オートモティブシステムズ（株） （株）藤澤技建　（株）冨士トレーラー製作所　（有）藤原養鶏場 プラザホテル山麓荘　　（株）フレンドール（２） （株）丸茂組　　宮腰精機（株）（２）　（株）ヤマダフーズ （株）リーディングアクター（２）
【県外就職】	（株）ＡＣメディエイト　　（株）サンデリカ （株）成田ビューホテル　　（株）向笠工務店 （株）Ｒｕｔｔｕ　　（株）ロッテ
【公務員】	自衛隊一般曹候補生（２）　　自衛官候補生　　大仙市

２．学年目標

最高学年としての誇りと自覚を持ち、地域社会に貢献する人間を目指そう。

一　最上級生として自分の行動に責任を持つ。

・諸行事や諸活動においてリーダーシップを執る。

・後輩の手本として振る舞う。

二　明確な進路目標を持ち、達成するために自分がすべきことを意識する。

・学力向上に向けて授業・補習等に積極的に取り組む。

・世の中の動きに関心をもち、主体的に考える。

・時間を有効に活用する。

三　地域社会に必要とされる態度や能力を身につける。

・さわやかな整容と明るい挨拶を心がける。

・思いやりの心を持ち、他者と積極的にコミュニケーションをとる。

・自己管理を徹底する。

３．進路活動

３年生１７２名の生徒の３４．５％にあたる６１名が就職し、その中の９割が県内に就職することになった。また、進学については四年制大学への進学者は２１名となり、その中でも秋田県立大学、秋田大学と国公立大学に３名合格することが出来た。短大は 保育や栄養、介護系に進もうとする生徒だった。将来の進路を見据えて選択した生徒が多かった。

４．生活全般

学校生活の様々な場面においてリーダーシップを執って頑張ってくれた。そのなかでも部活動の活躍はめざましく、多くの部活が東北大会や全国大会で活躍した。また、農業クラブ活動や学校行事でもこれまでの経験を踏まえて、熱心に取り組んだ。

５．最後に

３年間という期間で様々な出来事があった。問題があって頭を悩ますこともあったが、 生徒達の努力や、先生方の経験深い指導のおかげでなんとか乗り切ることが出来たと感謝しております。特に３年次は最大の目標でもある進路の実現に向けて、全ての教職員にお世話になりました。そのおかげで生徒も無事に卒業までたどり着くことができました。

新型コロナウイルスの関係で卒業式は教職員と卒業生のみとなりましたが、これも見方を変えれば、一生記憶に残る卒業式なのかもしれません。実際に晴れの姿を見られなかった保護者の気持ちを考えると申し訳ない気持ちにもなりますが、嬉しそうに卒業してくれたことが何よりもありがたいことです。

農業クラブ東北大会

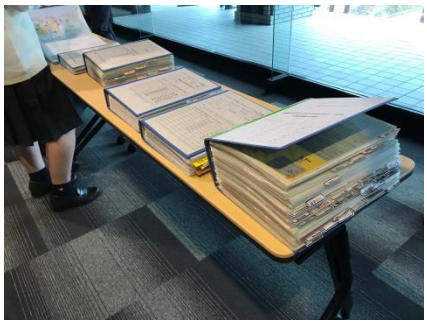
農業クラブ　入江　香織

大会名　：　第７０回　日本学校農業クラブ東北連盟大会
実施日　：　令和元年８月２２日（木）～２３日（金）
会場　　：　北秋田市文化会館
出場者・成績：

競技	クラス	生徒氏名	結果
農業情報処理競技	２Ｆ	黒澤優黄納	
各種発表　意見	２Ｆ	髙橋　ほのか	優秀賞
	３Ｆ	村上　結香	優秀賞
クラブ活動紹介発表	２Ｂ	佐々木　瑞菜	優秀賞
	２Ｂ	高橋　茉己	
	３Ｈ	阿部　愛璃	
	３Ｈ	佐藤　瑠香	
シンボルマーク表彰	３Ａ	大坂　結雨野	最優秀賞

競技			クラス	生徒氏名	結果
各種発表　プロ	Ⅰ類	草花	３Ｅ	髙橋　佑佳	優秀賞
			３Ｅ	加藤　夢姫	
			３Ｅ	横山　杏月	
			３Ｅ	近江　朱音	
			３Ｅ	島田　優美	
			３Ｅ	高橋　咲楽	
	Ⅱ類	生工	３Ｅ	鈴木　雅子	優秀賞
			３Ｅ	野中　優輝	
			１Ｈ	千葉　愛生	
		野菜	２Ａ	沼澤　真也	優秀賞
			２Ａ	浅利　華穂	
			２Ａ	深澤　優斗	
	Ⅲ類	家庭	２Ｈ	進藤　帆乃花	優秀賞
			２Ｈ	松田　安見子	
			２Ｈ	黒田　桃々子	
			２Ｈ	片山　月	
			２Ｈ	金森　芹奈	
			２Ｈ	藤井　麻耶	

感想：各種発表の結果は残念ながらすべて優秀賞でしたが、６年に一度の秋田県開催に８組２５名もの生徒が参加できました。これは、出場生徒はもちろん、ご指導くださった先生方の日頃の努力によるものと頭の下がる思いでいます。また、他校の生徒達の発表の素晴らしさに圧倒された姿や、大きな舞台を経験して自信をつけた姿を見ることができ、このような経験が生徒にとってどれほど価値のあるものなのかを再認識しました。他校の発表には、学校一丸となって同テーマに取り組んでいる発表や複数の指導者による発表があったので、学校全体の指導体制のあり方も考えながら毎年より多くの生徒が東北大会に参加できるよう指導していきたいと感じました。



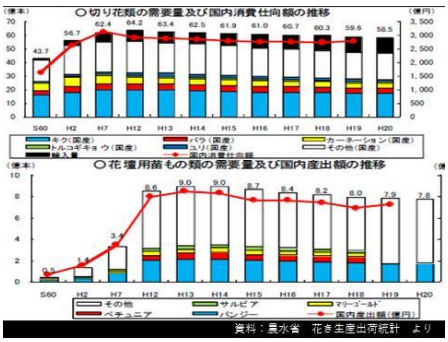
《農業クラブ東北大会参考資料》

プロジェクト発表　分野Ⅰ類　　「エディブルフラワーの効率的栽培を目指して」

園芸科学科３年　髙橋佑佳　加藤夢姫　横山杏月
近江朱音　島田優美　髙橋咲楽

１．研究の背景と動機

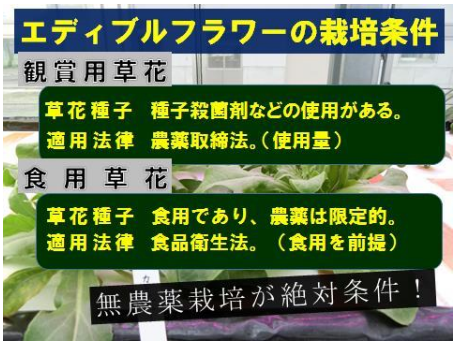
近年、切り花の需要量は減少の一途をたどっており、農林水産省が発表する花卉生産出荷統計を見てもその売上高は平成７年をピークに減少していることが分かります。特に花壇用の苗は減少率が高く、平成１３年以降生産量は大きく減少しています。



花壇苗を買い求めるお客さんにあふれ、地域が色とりどりの花で埋め尽くされる時代を取り戻したいと考えた私たちは、新しい需要を掘り起こすべく、近年話題を集めているエディブルフラワーに着目しました。エディブルフラワーとはその名の通り、食用とすることを目的として栽培される草花のことです。食の多様化に伴い消費が拡大しており、ＳＮＳなどの影響もあって近年世界で注目されています。

エディブルフラワーの最大の長所は「彩り」です。しかし、まだまだ添え物としての域を抜けきれておらず、豊富な栄養価を持つことはあまり知られていません。例えば、ビオラに含まれるビタミンＣはトマト８個分、カレンジュラに含まれるビタミンＡはトマト１７個分にあたります。

しかしながら、観賞用の草花で使うことのできる農薬が使用できないこと、食用を前提としたばあい、食品衛生法が適用されることなど無農薬栽培・低農薬栽培が絶対条件になっていることから生産量はあまり増えていないのが実情です。



野菜部門でリーフレタスの無農薬水耕装置に取り組んでいることを知った私たちはその設備を応用することで、エディブルフラワーの栽培ができないかと考えました。

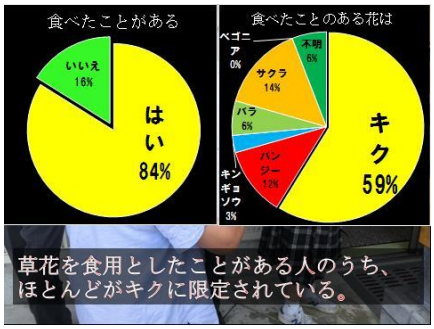
エディブルフラワー栽培プロジェクトのスタートです。

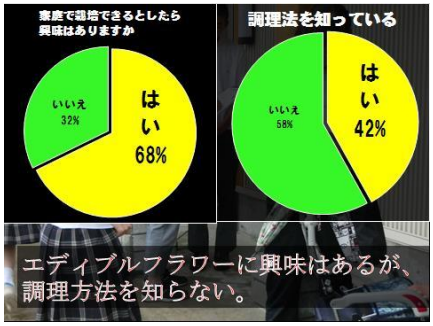
２．栽培計画と方針

まずは活動をする際の問題点や課題を整理しながら研究目標を決めました。エディブルフラワーで地域農業を活性化するために「生産方法の工夫」・「普及活動」そして「活用」の３点が必要になると考えました。今回はこの３つのうち生産方法に重点を置き、エディブルフラワーの水耕栽培が可能かどうかを検証するための実験を進めることにしました。収穫へ向けた当初年間活動計画はごらんのとおりです。エディブルフラワーの認知度を調査したり、家庭でできる水耕装置を試作したりするなど普及面も考えた計画を立案しました。

８月、本校のアグリマーケティングハウスにて行われた大農うめもん市の来客３１名にアンケート調査を実施しました。調査対象者の８４％が食用として草花を食べたことがあるものの、そのうち６０％弱がキクのみの経験で、そのほかの草花を食した経験がないことがわかりました。ま

た、エディブルフラワーを家庭で育ててみたいか。という質問に対しては７割の消費者が興味をもっている一方で、調理法は６割の人が知らないと答えるなど、普及に対する課題は山積していました。これらのアンケート結果から、今年度は生産コストの計算や栽培方法の確立を目指していくことに決めました。

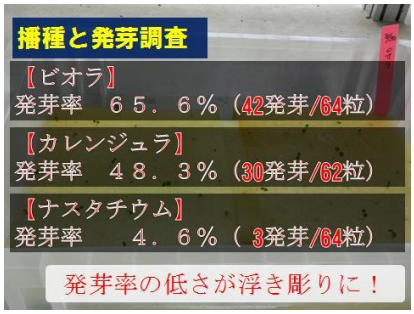




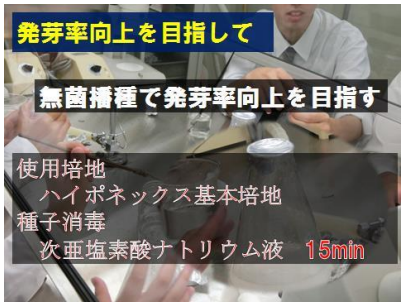
３．栽培実践と失敗

栽培にあたってベゴニア・ビオラ・カレンジュラ・ナスタチウムの４種類を対象としました。それぞれが一般家庭で栽培されていたり、栄養価が高かったりという特徴を持っており、最終的な普及には育てやすいという観点が欠かせないと考えたからです。

まずは、レタス水耕用のスポンジに一粒ずつ播種し、水を入れたバットの中で浸漬し給水させました。次に、一粒ずつ播種したスポンジを、大塚液肥１号・２号・５号を同量で用いＥＣ１．０に調整した水の入ったバットの中で浸漬して観察しました。２週間後の発芽状況がこちらです。発芽率が低く、栽培に成功したとしても普及するにはコストが大きすぎて期待できないため、播種方法を変更することにしました。

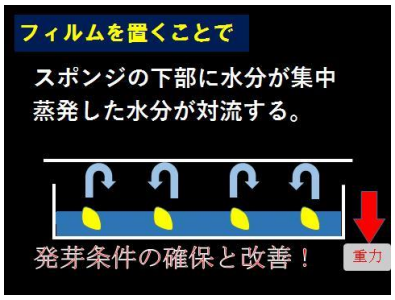


次に、無菌播種を用いて発芽率の向上を試みました。ハイポネックス培地を用い、種子消毒には次亜塩素酸ナトリウム液を使用しました。種子消毒を１５分間、その後培地に置床し、培養しましたが、種子によってはペレットコーティングが施されており、種子消毒液に長時間浸漬することができなかったため、結果的にコンタミネーションが発生してしまいました。



これらの失敗を経て発芽率を改善し、育苗方法を再検討する必要性を感じました。

昨年２月に新聞報道で、秋田市にあるスクールファーム河辺の存在を知りました。早速訪問させていただき、代表を務める曽我さんから電照条件や温度、ＥＣなどの栽培情報とプラスチックフィルムで被覆することで湿度を循環・維持させることで発芽率も改善できるのではないかというアドバイスをいただくことができました。通常、給水させたスポンジに播種をしても重力によって水分が下部に集中してしまい、そのまま水分が蒸発してしまいます。するとスポンジの上部が乾燥し、播種された種子は発芽できません。しかしプラスチックフィルムを被せることで、蒸発した空気が対流し湿度を循環させることができるのです。



４．栽培の工夫と結果および生育調査

この方法でビオラ・カレンジュラ・サルビアの３種類を播種したところ、培土へ播種するほどではないものの発芽率の上昇に成功しました。その後、ＥＣ１．０で育苗し、ＥＣ１.３　ＰＨ７．０に設定、１６時間照明に設定した水耕装置に定植しました。また、水耕装置の中で生育状態を比較するため、照明器具を蛍光灯区とＬＥＤ照射区に分け、生育状況を比較することにしました。

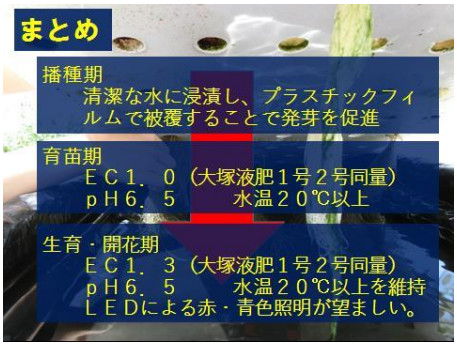
定植後２７日目にあたる６月３日にＬＥＤ照射区においてビオラの開花を確認することができました。他の２種類についても花芽形成を確認することができました。

定植後３５日目、３種類全ての花において開花を確認、エディブルフラワーの水耕栽培に成功しました。

ビオラの根長は蛍光灯照射区が１６cm、LED 照射区が２７cm、カレンジュラの根長は蛍光灯照射区のものが３７cm、LED 照射区が５０cm となりました。サルビアの根長も蛍光灯照射区が３２cm、LED 照射区が３９cm と、LED 照射区で旺盛な生育が確認できました。株の充実度もＬＥＤ照射区が充実していることが分かります。

５．まとめと今後の課題

これらの実験結果から、播種事前浸漬し、スポンジの上をプラスチックフィルムで覆うこと。育苗期はＥＣ１．０を維持して生育させ、定植後はＥＣ１．３に上昇させながら、ＬＥＤによる赤・青色照明を照射することで成長・開花を促進させることができることが分かりました。



これまでの活動によって生産に必要な条件を知ることができましたが、まだまだ発芽率や生産コストの計算まではできていません。今後はこれらの課題を解決し、地域農家や消費者への普及に力を入れていこうと考えています。

現在、家庭におけるキッチンガーデン方式で水耕栽培が可能かどうかを検討し、簡易水耕装置でのエディブルフラワー栽培について実験中です。また、地域への普及を考え、伝統料理にエディブルフラワーを使うことができないか試作中です。

花で賑わう地域を取り戻すために、草花が秘める可能性を引き出すために今後も頑張っていきます。

農業クラブ全国大会（農業鑑定競技会）を終えて

農業クラブ　菅原　慎太郎

大会名	第７０回日本学校農業クラブ全国大会　令和元年度南東北大会　農業鑑定競技会
実施日	令和元年１０月２３日（水）
会　場	福島県立福島明星高等学校
出場者	分野農業：３Ｂ 竹村大
	分野畜産：１Ａ 進藤瑞生
	分野食品：３Ｆ 寺田衣希、２Ｆ 佐井正人
	分野園芸：２Ｅ 高橋侑希、細井晶奈
	分野生活：３Ｈ 齋藤美穂、２Ｈ 松田安見子
成　績	分野生活　優秀賞　３Ｈ 齋藤美穂

農業鑑定競技会は、日頃の学習で得た農業に関する知識・技術の成果を、鑑定・判定・診断・審査技術にわたり、その実力を競い合うものです。出題数は４０問で、２０秒または４０秒というわずかな時間で鑑定・判定し、その正答率を競います。農業鑑定競技は、他の発表会や競技会に比べると地味な印象があるかもしれません。確かに地味ですが、やる気を持ってこつこつ勉強していけば、どんどん力がついていきます。自分で時間を作って、自分のペースで勉強を進めていくことができるので、そういうことが得意な人にはもってこいの競技です。

さて、今年度の農業クラブ全国大会は宮城県、福島県、山形県の３県合同で南東北大会として開催されました。本校からは５分野に８名の生徒が出場しましたが、結果は分野生活において齋藤美穂が２年連続で優秀賞となりました。一人でもこつこつと努力できる生徒を育てること、一人でも頑張ることができる環境を作ること、いかに意欲的に競技に取り組ませることができるかが、これからの課題だと思います。大農に赴任してきた春、農業鑑定の学習スペースを充実させたいとお話を受けたのですが、何もできずに終わってしまい大変反省しています。この反省を生かし、指導体制や指導方法などを見直し、次年度の指導を頑張っていかなくてはならないと感じました。本校の農業鑑定だけでなく、農業クラブの各種発表会や各種競技会については本校のみならず秋田県全体の課題でもあります。今回の全国大会における秋田県の入賞者を見ると、本校と金足農業高校の農業鑑定競技会優秀賞が２名いるだけでした。秋田県農業クラブとして全体で秋田県の農業を盛り上げていく必要があると感じました。

第70回日本学校農業クラブ全国大会
令和元年度南東北大会クラブ員代表者会議を運営して

教諭　岸　弘昭

今年度の日本学校農業クラブ全国大会は、南東北３県を（事務局：山形県置賜農業高等学校）開催県として行われ、その中でクラブ員代表者会議は、次のとおり実施された。東北各県に割り当てられた学校で３分科会９会場で運営等を担当した。本校は生徒４名で 10 月 22 日（火）の交流会及び 23 日（水）の分科会１第３会場の運営を担当したので、その内容について報告する。

大会スローガン
「繋がり聳える奥羽の高みは　我ら農クの理想と絆」
「東北に集いし未来の芽　今こそ咲かせよ希望の花」

期　　日　　令和元年 10 月 22 日（火）・23 日（水）

会場及び実施担当校
山形県立新庄神室産業高等学校

目　　的　　クラブ活動の事例をもとにした情報交換と連盟運営に関する意見交換を行い、クラブ員の資質の向上とクラブ活動の発展を図る。

実施基準　　平成 31 年度全国大会実施基準による。

日　　程　　10 月 22 日（火）
13:30～14:00　受　付
14:00～14:45　事前打合会
14:45～16:30　事前打合会・リハーサル（各分科会会場　教室）
19:00～20:00　交流会（瀬見温泉　観松館）
10 月 23 日（水）
8:30～ 9:00　受　付
9:00～ 9:30　開会式（体育館）
9:30～12:00　分科会（各分科会会場 教室）
12:00～12:50　昼　食（各分科会会場 教室）
13:00～14:45　分科会まとめ（情報処理室）
15:00～16:00　全体会（体育館）
16:10～16:40　総まとめ会（会議室）

本校運営担当生徒

司　　会	生活科学科２年　奥　山　美　咲 生活科学科２年　細　川　月　南
記　　録	農業科学科２年　高　橋　茉　己 農業科学科２年　佐々木　瑞　菜

各分科会指導助言者及び運営担当校

各　区　分	運営担当校	指導助言者
指導助言者代表	福島県立相馬農業高等学校	校　長　中　野　幹　夫
第１分科会－１	岩手県立盛岡農業高等学校	教　諭　千　葉　章　浩
第１分科会－２	青森県立柏木農業高等学校	教　諭　鳴　海　　純
第１分科会－３	秋田県立大曲農業高等学校	教　諭　岸　　弘　昭
第２分科会－１	宮城県立加美農業高等学校	教　諭　山　田　陽　一
第２分科会－２	岩手県立水沢農業高等学校	教　諭　菅　野　直　樹
第２分科会－３	福島県立相馬農業高等学校	教　諭　齋　藤　勇　樹
第３分科会－１	秋田県立金足農業高等学校	教　諭　大　石　一　博
第３分科会－２	宮城県立小牛田農林高等学校	教　諭　浅　野　武　己
第３分科会－３	福島県立岩瀬農業高等学校	教　諭　小　澤　紀　夫

分科会テーマ

分科会	テーマ	会　場	事例発表校
第１	「農業関係高校の魅力と農業クラブの活動を、小中学生を含めた地域に発信する方法があるか。」	第１会場	北海道ブロック 北海道中標津農業高等学校
		第２会場	北信越ブロック 福井県立福井農林高等学校
		第３会場	中国ブロック 岡山県立興陽館高等学校
第２	「農業クラブ員としての自覚をもち、意欲的に活動し、農ク活動をより活性化させるにはどうすれば良いか。」	第１会場	東北ブロック 青森県立名久井農業高等学校
		第２会場	東海ブロック 岐阜県立岐阜農林高等学校
		第３会場	四国ブロック 香川県立農業経営高等学校
第３	「私達クラブ員を含めた若い世代だけでなく、大人にも新規就農者を増やしていくために私達クラブ員はどのような活動ができるか。」	第１会場	関東ブロック 神奈川県立中央農業高等学校
		第２会場	近畿ブロック 奈良県立磯城野高等学校
		第３会場	九州ブロック 沖縄県立南部農林高等学校

10 月 22 日（火）の交流会の様子

クラブ員代表者会議の前日に瀬見温泉「観松観」にクラブ員が集い、23 日（水）の分科会が円滑かつ和やかに行われることを目的に、アイスブレイクやミニゲームを実施した。本校は第１分科会第３会場の運営主担当であったことから、自己紹介を兼ねた名刺交換会、アイスブレイク及びミニゲームとして言葉を使わない誕生日ゲーム並びにマシュマロチャレンジを実施した。交流会前半は、クラブ員同士が初対面であったことから、言葉数は少く、緊張感が感じられていたが、時間が進むにつれ和やかな雰

（名刺交換の様子）

囲気で会が進行できた。ミニゲームのマシュマロチャレンジは３名程度の班に分かれて実施したが、班員が協力し合いながら取り組んでいた。本校生徒は、周囲への気配りや声掛けを積極的に行っていたことから、参加しているクラブ員が終始和やかな雰囲気となっていた。

（マシュマロチャレンジの様子）

10 月 23 日（水）の分科会の様子

分科会では、岡山県立興陽館高等学校から、次の内容の事例報告があった。

・自校の活動紹介（ＥＳＤフィールドワーク、さつまいもの苗植えと収穫交流、ファミリー稲作＆スマート農業、後楽園等の出張庭づくり、世界ラン展への出場）
・岡山県内の農業高校の特色ある活動内容紹介

（分科会の様子１）

それに対して「良かったと思える点」や「改善点」についてグループ協議が行われ、各グループ内で集約した意見を報告・情報交換が行われた。

その後、第１分科会のテーマである、「農業関係高校の魅力と農業クラブの活動を、小中学生を含めた地域に発信する方法があるか。」について、視点を２つに分けてグループ協議が行われた。

（分科会の様子２）

１つ目の視点である「農業関係高校の魅力（農業クラブ活動も含む）については、次のような意見が出された。

・地域交流ができる。
・命、食の大切さを感じることができる。
・計画力や社会性が身に付く。
・自然と触れ合える。

以上のような意見から、「農業が教育資源になっている」が、前年度踏襲の取組に偏らないよう、改善をしていく必要があると結論付けられた。

２つ目の視点である、「小中学生を含めた地域への発信方法について」は、次のような意見が出された。

・地域交流
・ＳＮＳやマスメディアの活用
・ポスターや看板の設置
・体験学習の実施
・他校や施設との交流

以上のように、様々なツールを生かした情報発信をすることはできるが、一方向の情報発信にならないようにすべきと結論付けられた。

今後の課題として、

・前年度の取組の改善点を踏まえた取組にする。

・情報発信ツールの効果的な活用をする。
　以上の２点を念頭に、参加しているクラブ員が各校で取り組んでいかなければならないと決意を改にした。
　分科会のまとめとして、指導助言の先生からは、
・農業関係高校の魅力（農業クラブも含む）については、地域交流、地域貢献及び多世代間交流をとおして、普段の学習を深化させることができるとともに、身に付いた力を確認できる機会である。
・小中学生を含めた地域への発信方法については、情報発信ツールを有効に活用しているが、一方通行的な情報発信となりがちなので、双方向の情報発信となるよう工夫して欲しい。
　とお願いされ、会が終了した。

クラブ員代表者会議を運営して
　本校の生徒４名は、クラブ員代表者会議を運営することで、ファシリテーション能力が身に付いた。また、全国から参加したクラブ員との交流や情報交換をとおして、自校の農業クラブ活動を改めて見直すことができたもの考える。来年度の農業クラブ執行部として、今後の活躍を期待したい。

（分科会終了後の集合写真）

（参考資料）クラブ員代表者会議提出レポート

クラブ員代表者会議　参加者レポート

東北ブロック連盟　秋田県立大曲農業高等学校
農業科学科　２年　佐々木　瑞　菜
生活科学科　２年　細　川　月　南
農業科学科　２年　高　橋　茉　己
生活科学科　２年　奥　山　美　咲

１　第１分科会

「農業関係高校の魅力と農業クラブの活動を、小中学生を含めた地域に発信するにはどのような方法があるか。」

本校は農業クラブと生徒会組織が一本化しており、生徒会行事が全て農業クラブの行事となる。その中でも、本校の最大のイベントとも言える大農祭（学校祭）において、全校生徒による仮装行列が行われる。学校祭のテーマに沿って各クラスが仮装をし、大曲市内を練り歩く様子は壮観であり、毎年のように小中学生を含む地域住民からも好評を得ている。

また､大農祭では普段の学習活動の成果として､プロジェクト発表や意見発表も行われるとともに、農産物や農産加工品の販売も行われ、地域になくてはならない行事となっている。

ＳＮＳやＷｅｂ等などのインターネットを介した情報の発信は必須であると考えるが、伝統ある本校ならではの大農祭が、農業クラブ活動を十分にＰＲしていると思われる。

２　第２分科会

「農業クラブ員としての自覚をもち、意欲的に活動し、農ク活動をより活性化させるにはどうすればよいか。」

本校では、生徒会組織＝農業クラブ活動である。運動部、文化部及び農業部が組織の一つとして、構成されていることから、課外活動全てが農業クラブ活動と言え、概ね本校のクラブ員は意欲的に活動していると思われる。課題としては、運動部や文化部に比べ、農業部への入部率が低いことである。

また､どの部活動にも加入していないクラブ員がいることから､より課外活動が活発化できるよう、新入生はもちろん、どの部活動にも入部していない在校生に対して、部活動の勧誘や部活動紹介に工夫をする必要があると感じている。

３　第３分科会

「私達クラブ員を含めた若い世代だけでなく、大人にも新規就農者を増やしていくために私達クラブ員はどのような活動ができるか。」

本校では２月に「職業としての農業」フォーラムが行われている。本フォーラムは、本校生徒を対象として、本校と地域振興局の連携の下、実施している。就農意識を啓発することを目的として、農業が職業の選択肢の一つに加わるよう､様々な就農スタイルについて情報提供を行ってもらっている。

昨年度までは本校生徒のみを対象としていたが、今年度は、地域住民、保護者及び近隣の高校の生徒も参加できるよう、アナウンスしていきたい。また、本フォーラムの様子を報道機関等を通して発信することで、新規就農者の増につなげていければと考えている。

クラブ員代表者会議へ参加するに当たり、本校の農業クラブ活動がさらに活発化できるよう、全国の農業高校生と積極的に情報交換をしたい。

インターハイ・国体を終えて

自転車競技部　髙川　健悟

インターハイ　～感動は無限大南部九州総体２０１９～

大会期間　　：令和元年７月３０日（火）～８月１日（木）
トラックレース：沖縄圏総合運動公園　自転車競技場
ロードレース　：名護市特設ロードレースコース

今年度のインターハイは南九州ブロックで行われた。自転車競技は沖縄県での開催となり、移動方法・機材の輸送方法など例年とは違う形での大会参加となった。また、飛行機の都合などにより、競技開始の３日前に会場入りする必要があった。このような条件や暑さなどからモチベーション・コンディションの維持に苦慮する大会となった。今回のインターハイでは総勢６名の選手が出場権を獲得することができた。

インターハイ最初の種目であるチームスプリントは今季ベスト更新を目指し１分５秒を目標としたが、スタートから選手が揃わず、無駄な体力を使ってしまい、９位と入賞を果たすことができず、チームに勢いをつけることができなかった。その後に行われた個人種目は、それぞれの選手が全力で臨んだ。糸井星夜は１ｋｍタイムトライアルにおいて、８位入賞を果たすことができた。今回のインターハイでは競技以外の場面での課題が浮き彫りになった。

来年度石川県で行われるインターハイでは、十分なコンディション管理を行い、多くの選手の入賞に繋げて行きたい。

国民体育大会　～いきいき茨城ゆめ国体２０１９～

大会期間　　：令和元年９月２９日（日）～１０月３日（木）
トラックレース：茨城県取手市　取手競輪場
ロードレース　：茨城県つくば市　つくば市特設ロードレースコース

今年度の国体は茨城県で開催となり、本校から少年選手として５名が選出され出場した。

１ｋｍタイムトライアルに出場した糸井星夜（３Ａ）が８位入賞を果たし、６年振りとなるポイント獲得を果たし、秋田県選手団に貢献することができた。

秋田県チームとして６年振りの入賞を果たし、今後、全国で戦うための試金石となる大会となった。強化拠点校として３期目最後の年となる来年度に向け、目標とする全国ベスト４以上に向けて、更なる強化に努めたい。

【全国大会出場者一覧】

	種目	出場選手	
		インターハイ	国体
個人	１ｋｍタイムトライアル	糸井星夜　（３Ａ）	糸井星夜
	スプリント	嵯峨旭陽　（２Ａ）	後藤圭輝（２Ｂ）
	４ｋｍ速度競争	邑山颯太　（２Ａ）	実施されていない
	ケイリン	本村玲允　（２Ｂ）	嵯峨旭陽
	ポイント・レース	高橋まりお　（２Ｅ）	高橋まりお
	スクラッチ	無し	須田祐人
	個人ロードレース	高橋まりお	後藤圭輝・高橋まりお
団体	チーム・スプリント	糸井星夜・須田祐人（３Ｂ）・嵯峨旭陽	

全国大会を終えて

柔道部　我妻　沢美

感動は無限大　南部九州総体　２０１９
　大会期間：令和元年８月９日（金）～１３日（火）
　大会会場：鹿児島アリーナ
出 場 者：男子団体　　加賀谷優龍（３年）　進藤　叶汰（３年）　佐藤　幸也（３年）
　　原　　優輝（３年）　関根　拓磨（３年）　門脇　学都（３年）
　　男子個人　６６kg級　加賀谷優龍（３年）
　　男子個人１００kg級　佐藤　幸也（３年）
　　女子個人　４８kg級　松本　朱音（２年）
　　女子個人　５２kg級　松本　玲菜（２年）

２０１９年度全日本ジュニア柔道体重別選手権大会
　大会期間：令和元年９月１４日（土）～９月１５日（日）
　大会会場：埼玉県武道館
　出 場 者：男子６６kg級　　加賀谷優龍（３年）

柔道部は今年度の全県総体の男子団体試合で２７年ぶり４回目の優勝をして、インターハイに出場することができました。昨年度には全国高等学校柔道選手権大会に出場はしたものの、この大会は勝ち抜き試合で行われる試合で､これまで勝ち抜き試合ではない通常の試合方式の大会は３回行われて、一度も優勝することができていませんでした。また、３月の人事異動で顧問が変更になったこともあり、優勝は難しいのではないかと予想されていました。

全県総体の男子団体試合では、大事な場面で力を出しきって素晴らしい試合をすることができました。これは、部員が本気で優勝を目指して、それにふさわしい稽古を積み重ねてきたからだと思っています。本当に見事な優勝でした。

個人戦では４名がインターハイ出場権を獲得しました。また、加賀谷優龍は６月に八戸市で開催された全日本ジュニア柔道体重別選手権大会東北予選会で優勝して、２０歳以下の日本代表を選考するために行われる全日本ジュニア柔道体重別選手権の出場も決めました。

インターハイの男子団体試合では、北信越地区１位の福井工大附属高校と対戦しました。大型の有力チームとの対戦となって、粘り強く戦いましたが、結果的に大差をつけられて敗戦しました。出場した選手は各自の持ち味を発揮して試合をしてくれたと思います。体の大きさを言い訳にすることはできませんが、インターハイで上位に食い込むためには、重量級の有力な選手が必要ですが、今年の本校は主力が軽量級の小兵チームで、難しい試合となりました。個人戦では、優勝を狙った加賀谷に期待がかかりましたが、初戦で石川県の有力な選手と対戦し、延長線の末に敗れてしまいました。佐藤幸也、松本朱音、松本玲菜も自力を発揮して、善戦したものの、勝利することはできませんでした。

９月に開催された全日本ジュニア柔道体重別選手権大会では、加賀谷優龍が初戦で２位になった國學院大學の選手と対戦して敗れてしまいました。卒業後に、もう２回この大会に挑戦することができるので、今回の経験を活かして、日本代表を目指してもらいたいと思います。

今年度は２７年ぶりに男子団体優勝ということで、インターハイに出場することができましたが、引き続き強化を推進して、続けて全国大会に出場していくことで全国レベルに近づいていけると思っています。今後も校訓の実現を目指し、部活動を通じて社会に有益な人材を育成できるように指導に取り組んで行きたいと思います。

インターハイを終えて

相撲部　小松　清高

昨春、長年にわたり指導されてきた小林和成先生から顧問を引継ぐことになった。今年度は、新入部員がおらず、部員２名と少なく、残念ながら団体戦に出場することができず、個人戦でインターハイ出場を目指すこととなった。

日頃の稽古も２人では、限られた内容しかできず、稽古相手を求めて OB や小中学生が稽古する地元の中学校や私の母校への出稽古、県連盟主催の県内外の強化合宿に参加し、普段の稽古ではできない申し合い（勝ち抜き戦）や三番稽古、社会人選手との充実した稽古を重ね、自信と実力をつけて試合へ臨むことができた。

６月１日に県立武道館で行われた沖縄インターハイへの出場をかけた全県総体個人選手権（インターハイ予選）では、県内外から注目されている３年生の平野颯人は、昨年の勝者、３年生としての意地、「絶対優勝、１位通過で沖縄インターハイへ」というプレッシャーから気持ちが焦った隙を突かれ、２年連続の優勝を逃し第２位、入学以来、頼もしく成長してきた２年生の髙橋大樹が第３位に入賞し、部員２名ともに県代表３枠のインターハイ出場権を勝ち取ることができた。

７月２６日から２８日に沖縄県那覇市の沖縄県立武道館で行われたインターハイに出場した２名ともインターハイ独特の雰囲気、真夏の沖縄で、秋田とは違う炎天下の中で、一つ一つの試合を大切に果敢に相手と向き合い勝負を挑んだ。

小学生で「わんぱく相撲」を始めた頃から入学を目指す学生相撲の名門大学があり、その夢を叶えるべく、日頃の稽古を直向きに励んできた成果を大学の監督の前でアピールしたい平野は、予選１回戦で岐阜農林の山藤選手と対戦し、勝負がついたと油断した隙を狙われ「いっぽんぜおい」でまさかの負け、あとが無い状況となった。平野もまさかの「負けた悔しさ」からここから勝負をかけていくと意気込み、気持ちを切り替えて臨んだ２回戦、強豪埼玉栄の手計選手に得意の「おしたおし」で見事勝ち、この勢いのまま決勝トーナメントに進むことがきた。決勝トーナメント１回戦で今大会を制した静岡飛龍の大桑選手と対戦し、「つきだし」で惜しくも敗退し、個人ベスト３２（優秀選手賞）で終え、目標の成績にはあと一歩及ばず、中学時代に残した成績を超えることはできなかった。

髙橋は、初出場であの独特の会場の雰囲気に緊張しながら試合に臨んだ。予選の対戦相手の顔ぶれをみて、最初の２人に勝ち、予選突破を目論んでいた。１回戦の山梨都留興譲館の篠塚選手を「よりたおし」で破り、この勢いで２，３回戦に臨んだものの、あと一歩及ばず、初のインターハイは１勝２敗予選敗退で終え、目標の予選突破はならなかった。今後の大会に向けた課題も多く見つけることができた。

出場した２名とも、満足いく結果を残すことはできなかったが、インターハイという大舞台の土俵に立てたこと、試合を通じて得たことは選手、私ともに良い経験をさせていただいた。

私も選手時代の富山、山梨インターハイ以来、初めて顧問として沖縄インターハイに参加し、往年の選手達も指導者として参加しており、久しぶりの再会に懐かしさを感じた。

平野は、昨年末に夢を抱いていた学生相撲の名門大学に見事合格し、今春から新たな環境で「学生横綱」を目指して、髙橋は、また、あの独特の会場の雰囲気を味わいたいと８月に青森県十和田市で開催されるインターハイに向けて稽古に励んでおり、昨秋の県新人大会、東北高校相撲選抜大会で第２位に入賞し、３月下旬に高知県で行われる全国高校相撲選抜大会への出場を決めており、更に飛躍できるようにこれから一踏ん張りさせたい。

最後になるが、いつも部員のことを気にかけてくださった高体連相撲専門部会長の小林吉則校長先生、前顧問の小林和成先生、部長の鈴木文樹先生、OB の庄司光希コーチ、保護者、大農相撲部後援会（OB 会）の皆さんをはじめ多くの方々の支えがあり、インターハイに出場することができた。部員と共に感謝の気持ちを今後の大会で期待に応えられるよう一層努力したい。

インターハイ・国体を終えて

なぎなた部　髙橋　菜津美

感動は無限大　南部九州総体　２０１９

大会期間：令和元年８月９日（金）～１２日（月）

大会会場：沖縄県立武道館

出 場 者：演技　石田 光李（３年）　村田 茉璃（２年）

個人　石田 光李（３年）

２０１９　いきいき茨城ゆめ国体

大会期間：令和元年９月２９日（日）～１０月１日（火）

大会会場：西部総合公園体育館

出 場 者：石田 光李（３年）

台風が接近する中で行われた今年度のインターハイには、なぎなた部唯一の３年生である石田光李が演技競技と個人試合の２種目へ出場した。入部当初から同級生がおらず、心寂しいときもあったが、持ち前の明るさと前向きな気持ちで先輩や後輩との練習を積み重ねてきた。昨年度のインターハイでは団体メンバーの一員として試合に出場したが、メンを一本取られるという悔しい結果に終わり、今年のインターハイこそは悔いの残らないように全力で戦うと心に決めてこの大会をむかえた。

演技競技には、仕掛け･村田茉璃（２年）、応じ･石田光李（３年）が出場。「２人の呼吸を合わせて全力でやる」と心に決めて試合に挑んだ。練習でも２人の呼吸が合わず、苦労した場面も多くあった。予選は３チームのリーグ戦が行われ、１試合目は大垣商業高校の延・中村チームに惜しくも３－２で敗れた。その後、２試合目の初芝橋本高校の宮本・岡本チームにも４－１で敗れ、予選リーグ敗退で終わった。

個人試合には前年度の新人戦、今年度の全県総体、県民体育大会の３大会で個人戦優勝を成し遂げた石田光李が出場。予選リーグは石田を含む３人リーグで行われた。１試合目はメンを決め、一本勝ち、２試合目は延長戦の末、得意とするメンで一本勝ちし、予選リーグ２勝０敗の文句なしの結果で決勝トーナメントへ進出した。決勝トーナメント１回戦の相手は熊本西高校の内田選手。相手の隙を狙った攻めを展開し、一本取ることはできなかったものの判定で勝利し、次の試合へ駒を進めた。２回戦は埼玉栄高校の土田選手。石田が得意とする側メンを中心に、相手の隙を突く試合を展開していたが一本決めきれず、そうこうしているうちに相手の調子も上がってしまい、延長戦の末、判定２－１で敗北を喫し、ベスト１６で終わった。試合後、石田はあと一歩で入賞を逃したことに対して悔しさを滲ませていたが、自分らしく全力で試合ができたので楽しかったと振り返っていた。

その後、石田は「いきいき茨城ゆめ国体」にも出場した。今年度は東北ブロック予選も無事通過し、演技競技と試合競技に出場することができた。演技競技では、大曲高校の選手とペアを組んで出場。お互いの学校を行き来して何度も納得がいくまで演技を合わせて国体に臨んだ。本番では、１回戦で福井県と対戦し、５－０で敗れてしまった。また、石田は試合競技に中堅で出場した。１回戦の相手は、同じ東北ブロック予選を戦った福島県。相手の特徴を分析して挑んだが、先鋒が相手にメンを決められてしまった。続く中堅の石田は、取り返そうと果敢に攻めていったが、相手に隙を突かれ、側面を決められてしまった。その後、大将もメンを２本決められ、福島県との対戦に敗れた。インターハイが終わるや否や国体への強化が始まり、毎週のように遠征や強化練習に参加することになった。思うようにできずに悔し涙を流すこともあったが、同じ少年女子チームのメンバーとお互いに励まし合いながら国体を迎えることができていた。最後の試合では負けてしまったものの、秋田県の代表選手として堂々と試合をしてくれたと思う。

最後に、インターハイ・国体に出場するにあたり、たくさんの方々から応援していただき、心から感謝している。こうしてなぎなたに一生懸命取り組むことができるのも、たくさんの人の支えがあってこそということを忘れず、これからも自己研鑽に励んでいきたい。

令和元年度全国高等学校総合体育大会に参加して

女子ハンドボール部　山本　　力

感動は無限大　南部九州総体２０１９

大会期間：令和元年８月３日（土）～９日（金）
大会会場：山鹿市総合体育館、山鹿市鹿本総合体育館
出 場 者：佐々木彩名（３年）高橋ほの香（３年）藤川陽向（３年）小玉紗倉子（３年）
髙橋平莉（３年）嵯峨美海（３年）平岡桃香（２年）伊藤愛菜（２年）
柿崎未愛（２年）本間未悠（２年）中川あかり（１年）加藤沙月（１年）
沼倉未磨（１年）佐藤愛南（１年）粟津柚葉（１年）鈴木葵（１年）

３年ぶりのインターハイの出場を決めた秋田県予選は、まれに見る大激戦だった。ここ２年間は部員不足のために思うような結果が出せないでいたため、今年こそはという思いが強かった。結果的にライバルである湯沢高校とは引き分けに終わり、得失点差で上回り優勝した。

苦しみながら勝ち取ったインターハイだったが､対戦相手はここ数年において国体の開催で力をつけてきている愛媛県の今治東中等教育学校だった。

試合開始早々に相手にペースを握られて、４－０とリードされてタイムアウトを取り少し流れを変えるも､相手の多彩な攻撃を守り切ることができずに､前半は１６対８とダブルスコアで折り返した。後半になっても、今治東の運動量が衰えず、５分過ぎには１９対１０とリードを広げられる。藤川陽向（３年）や高橋ほの香（３年）の得点で追い上げるが、相手も踏ん張り点差がなかなか縮まらない状況でゲームが終了した。最終的に２０－３０という試合だった。

部員のほとんどが高校入学でハンドボールを始めた選手で構成されたチームだったが、全国大会出場を目標に努力し、本番の試合でも相手に臆すること無く最後まで堂々と試合をしてくれたことに感謝している。

また、熊本という遠方にも足を運び全力で応援していただいた保護者会の皆様にも感謝申し上げます。

今年度の研究集録が完成いたしました。年度末のお忙しい中、たくさんの先生方に寄稿頂きましたことを感謝申し上げます。皆様の今後の教育活動にご活用いただければ幸いです。

研修部